

平成19年度 報告書

周防大島地域連携型中高一貫教育

～確かな学力と豊かな人間性を身につけ、一人ひとりの夢を実現する学校～



山口県立周防大島高等学校
周防大島町立東和中学校
周防大島町立日良居中学校
周防大島町立安下庄中学校

目 次

1	はじめに	3
2	地域・学校の概要	4
	(1) 地域の概要	4
	(2) 学校の概要	4
	(3) 実践研究組織	5
	(4) 実践研究の経過	6
3	実践内容とその成果および課題	8
	(1) 本地域の目指す中高一貫教育	8
	ア これまでの取組の概要	8
	(2) 実践研究の課題	10
	(3) 「確かな学力の向上を目指し、生徒の進学希望に応える教育の推進」および 「生徒の進路希望に対応した選択幅の広い教育の推進」の取組	10
	ア 中高で連携した特色ある教育課程の編成	10
	イ 中高教員による指導方法の工夫・改善	15
	ウ 基礎学力の定着度の確認方法および指導へのフィードバック	18
	エ 「周防大島高校が求める5教科の力」の活用	21
	オ 6年間を見通した計画的な資格取得	22
	(4) 「6年間を見通したテーマ学習」の取組	24
	ア ねらい	24
	イ 中学校における取組	24
	ウ 高等学校における取組	24
	エ 評価について	26
	オ 成果と課題	26
	カ 今後の展望	27
	(5) 「体験的な学習を重視した学校行事」の取組	27
	ア ボランティア活動	27
	イ イングリッシュキャンプ（英語サマーセミナー）	28
	ウ ふれあいマラソン大会	29
	エ ふれあいみかん収穫作業	30
	オ 私の主張・郷土おおしま発表大会	31
	(6) 「6年間を見通した進路指導」の取組	33
	ア 進路指導目標	33
	イ 中高6年間の指導計画	33
	ウ 取組	34
	エ 成果と課題	35
	オ 今後の展望	35
	(7) 「6年間を見通した生徒指導」の取組	36
	ア 生徒指導目標	36
	イ 中高6年間の指導計画	36
	ウ 生徒指導年間計画	38
	エ 取組	39
	オ 成果と課題	41
	カ 今後の展望	41

(8)	各教科での取組	42
ア	国語科	42
イ	社会科	43
ウ	数学科	43
エ	理科	44
オ	英語科	47
カ	音楽科	49
キ	保健体育科	49
ク	情報科	50
4	おわりに	52

1 はじめに

今年度4月の周防大島高等学校の開校により、安下庄高等学校は2・3年生のみとなり、新入生として安下庄校舎には周防大島高等学校普通科1年次生、久賀校舎には周防大島高等学校福祉科1年次生を迎え入れた。従って、今年度の周防大島地域連携型中高一貫教育は、周防大島町立東和中学校・日良居中学校・安下庄中学校と安下庄高等学校・周防大島高等学校の間での取組である。これに、今年度は試行として、来年度から新たに連携に加わる久賀中学校がいくつかの取組に参加した。

平成13年度に始まる周防大島地域連携型中高一貫教育は、このたびの高等学校の再編統合のほか、来年度の久賀中学校の連携への加入、さらに平成21年度の中学校再編統合による郡内全中学校への連携枠拡大も控えており、従来の取組をそのまま継承するだけでは立ち行かなくなる時期を迎えた。今後の数年間は、これまでの実践を根本から見直し、新しい形での取組に円滑に移行するための重要な転換期にあるといえる。

このことを踏まえて、今年度はいずれの取組においても今後のあり方を視野に置いたものとし、改善・充実のための検討も行ったところである。

2 地域・学校の概要

(1) 地域の概要

本地域は、瀬戸内海に浮かぶ周防大島（屋代島）の東部に位置し、豊かな自然に恵まれており、みかんを中心とした農業と漁業の盛んな所である。本州と島を結ぶ大島大橋が開通してから、島で暮らす人々の生活の変容ぶりには目を見張るものがあるが、澄んだ空気と、のどかな雰囲気は今も昔も変わらないままである。

また、本地域は、日本中を旅した民俗学者・宮本常一の出身地でもある。平成16年にオープンした周防大島文化交流センターには、宮本常一が残した膨大な数の写真のデジタルデータが保存されており、宮本常一の足跡を全国に発信している。また、故人の遺志を継ぐ動きとして、学びの場である『郷土大学』の講義が定期的に行われている。この宮本常一の研究手法を学ぶことによって、子供たちがより深くふるさと大島について学び、大島を愛する心を育てることを試みている。

地域住民の学校教育に対する関心の高さは、安下庄高校の前身である旧制安下庄中学校が全国でも珍しい町立中学校として創立した歴史があることからもうかがえる。地域の学校教育への理解も深く、地域の教育力で学校が支えられている。

さらに旧橋町では、昭和38年に米国ハワイ州カウアイ島と姉妹島縁組みを結んでおり、平成10年度から平成17年度までの間に、安下庄高校ではハワイ修学旅行をするなど、ハワイ州との交流も盛んである。

平成16年10月1日に大島郡の4町が合併して、周防大島町として再出発した。近年の少子化と若者の流出により町は高齢化の一途を辿ってはいるが、高齢者の福祉制度の充実やブロードバンド化の推進、町の良さを再発見する様々なイベントが企画されるなど、高齢者にとって住みよい、活力に溢れる町である。

(2) 学校の概要

周防大島高校は、安下庄高校のある安下庄校舎(普通科)と久賀高校のある久賀校舎(福祉科)という2校舎体制で今年度4月に開校した。

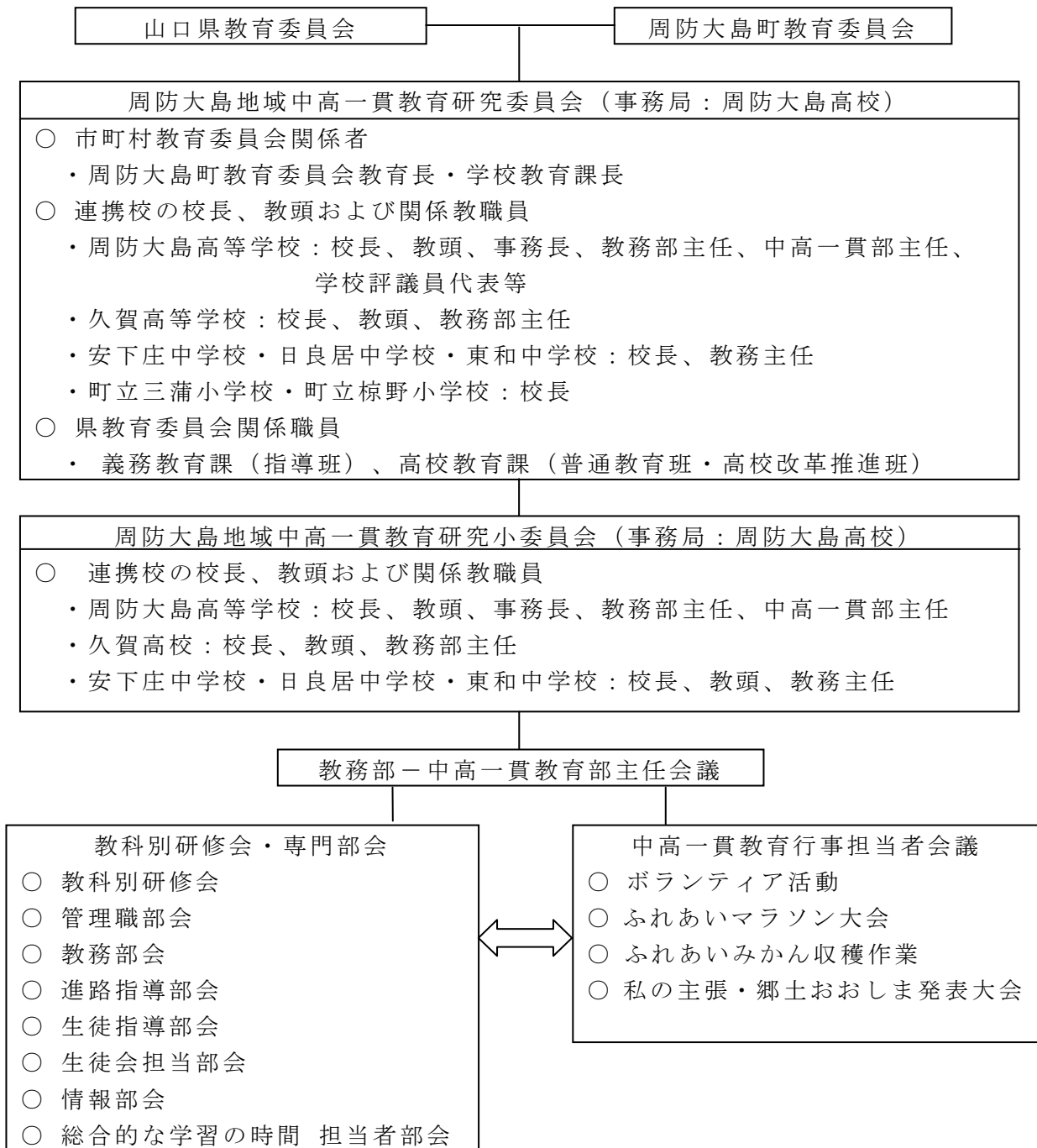
中高一貫教育については、安下庄高校と近隣の周防大島町立東和中学校・日良居中学校・安下庄中学校の3中学校で、県内初の連携型中高一貫教育校として平成13年度からスタートした。

安下庄校舎には生徒178名が学んでおり、1年の国語・数学・英語と、2年の一部の授業で習熟度別少人数指導を行い、きめ細かな指導を実施している。

連携する3中学校のうち、まず安下庄中学校は各学年1クラスで、生徒数72名であり連携中学校の中で一番生徒数の多い学校である。次に、日良居中学校は全校生徒数31名という小規模校である。東和中学校は全校生徒数56名である。なお、今年度試行に参加した久賀中学校は生徒数82名である。

連携3中学校ともに、連携型中高一貫教育に加えて平成17年度から地域の小学校との小中連携にも取り組んでいる。これにより、周防大島地域全体が地域の子供たちは地域で育てるという体制が整い、小学校から高校までの12年間という大きなスパンで教育活動に取り組むことができるようになった。

(3) 実践研究組織



(4) 実践研究の経過

月 日	実 施 内 容
4月 4日(水)	第1回周防大島地域中高一貫教育合同研修会 (14:00～ 安下庄高校)
4月 9日(月)	周防大島高校開校式
4月23日(月)	連携中学校の保護者等への安下庄高校や中高一貫教育の概要説明 (日良居中学校)
5月 2日(水)	第2回中高一貫教務主任会議 (14:00～ 安下庄中学校)
5月 7日(月)	中高一貫カウンセリング活動 (安下庄中学校卒業生対象)
5月 8日(火)	平成19年度交流授業開始 中高一貫カウンセリング活動 (日良居中学校卒業生対象) 連携中学校の保護者等への周防大島高校や中高一貫教育の概要説明 (安下庄中学校・東和中学校)
5月10日(木)	中高一貫カウンセリング活動 (東和中学校卒業生対象)
5月10日(木)	周防大島地域中高一貫研究委員会 (13:00～ 周防大島高校安下庄校舎) 第3回中高一貫教務主任会議 (16:00～ 周防大島高校安下庄校舎)
5月31日(木)	第4回中高一貫教務主任会議 (14:00～ 日良居中学校)
6月19日(火)	第2回周防大島地域中高一貫合同研修会 (16:00～ 橘総合センター)
6月28日(水)	日良居中学校において交流授業における研究授業 (中学校2年国語)
7月2日(月)	第5回中高一貫教務主任会議 (14:00～ 東和中学校)
7月7日(土)	周防大島高校 (普通科) オープンキャンパス (10:00～12:40 周防大島高校)
7月12日(木)	ボランティア活動第1回担当者会議 (14:00～ 周防大島高校会議室)
7月17日(火)	ふれあいみかん収穫作業第1回担当者会議 (14:00～ 周防大島高校会議室)
8月3日(金)	広島県立加茂北高校学校訪問 (連携型中高一貫校)
8月7日(火)	第3回周防大島地域中高一貫合同研修会 (13:30～橘総合センター・安下庄中学校) (秋芳・美東地域から美祢高校教頭が参加)
8月17日(金)～ 19日(日)	イングリッシュキャンプ (橘ウインドパーク)
8月24日(金)	周防大島高校福祉科オープンキャンパス (周防大島高校久賀校舎)
8月24日(金) 夏休み中	第2回秋芳・美東地域中高一貫教育合同研修会参加 中高一貫ボランティア活動
9月2日(日)	安下庄高校、周防大島高校体育祭にて連携中学校ほか招待リレー
9月8日(土)	ボランティア活動 (日良居中学校運動会運営に安下庄、周防大島高校生が協力)
9月11日(火)	第2学期連携中高相互交流授業開始
9月27日(木)	安下庄高校・周防大島高校、安下庄中学校生徒による交通安全キャンペーン
10月1日(月)	久賀中学校との連携にかかる第1回交流授業打ち合わせ会議 (久賀中学校)
10月3日(水)	県教委学校訪問にかかる研究授業公開 (周防大島高校)
10月9日(火)	第7回中高一貫教務主任会議 (周防大島高校)
10月12日(金)	平成19年度柳井地域学力向上ジョイント研修会において連携型中高一貫教育に関する研究発表
10月16日(火)	平成19年度全国高等学校教育改革研究協議会参加 (東京)
10月23日(火)	保健体育科における交流授業実施 (周防大島高校)
11月1日(木)	キャリアカウンセリング (日良居中学校)
11月5日(月)	ふれあいみかん収穫作業第2回担当者会議
11月8日(木)	安下庄中学校養護教諭によるカウンセリング活動

11月9日(金)	東和中学校養護教諭によるカウンセリング活動
11月12日(月)	日良居中学校養護教諭によるカウンセリング活動
11月14日(水)	ふれあいマラソン大会
11月19日(月)	進路相談(東和中学校)
11月21日(水)	私の主張・郷土おおしま発表大会第1回担当者会議(周防大島高校)
11月28日(水)	第4回合同研修会(東和中学校)
12月4日(火)	東和中学校社会科研究授業
12月7日(金)	ふれあいみかん収穫作業 久賀中学校、交流授業における研究授業(国語科)
12月11日(火)	ふれあいみかん収穫作業
12月12日(水)	東和中学校人権教育参観日ならびに学校保健委員会 久賀中学校、交流授業における研究授業(数学科)
1月9日(水)	第9回中高一貫教務主任会議(安下庄中学校)
1月15日(火)	中学生対象のキャリアセミナー(安下庄中学校、東和中学校)
1月17日(木)	第2回中高一貫研究委員会(周防大島高校久賀校舎)
1月21日(月)	交流授業試行における英語研究授業(久賀中学校)
1月22日(火)	私の主張・郷土おおしま発表大会(橘総合センター)
1月25日(金)	御調地域連携型中高一貫教育公開研究会参加(尾道市 御調高校)
2月6日(水)	連携型中高一貫教育に係る入学者選抜
2月7日(木)	(周防大島高校安下庄校舎)
2月20日(水)	中学生対象のキャリアセミナー(日良居中学校)
2月25日(月)	第10回中高一貫教務主任会議(日良居中学校)
3月4日(火)	第5回周防大島地域中高一貫教育合同研修会(周防大島高校安下庄校舎)
3月17日(月)	春休み学習会①(周防大島高校安下庄校舎)
3月25日(火)	春休み学習会②(周防大島高校安下庄校舎)

3 実践内容とその成果および課題

(1) 本地域の目指す中高一貫教育

○ コンセプト

確かな学力と豊かな人間性を身につけ、一人ひとりの夢を実現する学校

○ コンセプトを実現するための4つの柱となる教育活動

1 確かな学力の向上を目指し、生徒の進学希望に応える教育の推進

2 生徒の進路希望に対応した選択幅の広い教育の推進

3 地域とともに生きる福祉教育の充実

4 地域の生徒を地域で育てる教育の推進

昨年度までの本地域の中高一貫教育における基本コンセプトを実現するための三本柱として設定された「一人ひとりの学力の充実をめざす教育」、「6年間を見通したテーマ学習」、「体験的な学習を重視した学校行事」を踏襲し上記の4つのコンセプトを立てた。さらに、「6年間を見通した進路指導」や「6年間を見通した生徒指導」にも取り組み、様々な成果をあげてきた。

ア これまでの取組の概要

(ア) 確かな学力の向上を目指し、生徒の進学希望に応える教育の推進

生徒の進路希望に対応した選択幅の広い教育の推進

- 生徒一人ひとりの学力の充実をめざす教育システムの構築（図1参照）
- 中高6年間を見通した特色ある教育課程の編成
 - ・ 中学校における各教科年間指導計画の共通化
 - ・ 中学校における多様な選択教科の開設（「B S (Basic Study)教科、S S (Skill Study)教科、E S (Expression Study)教科」）
 - ・ 高等学校1年の国語・数学・英語における習熟度別少人数指導の実施
 - ・ 高等学校2年から、生徒の個性や進路に応じた多様なコース・系列の設定
- 中高教員による指導方法の工夫改善
- 基礎学力の定着度の確認方法及び指導方法へのフィードバック
- 「周防大島高校が求める5教科の力」の作成および活用方法の工夫・改善
- 6年間を見通した計画的な資格取得
- 連携中学生の中学校修了後の「ゆとり」を生かした指導の実施（数学科・英語科）

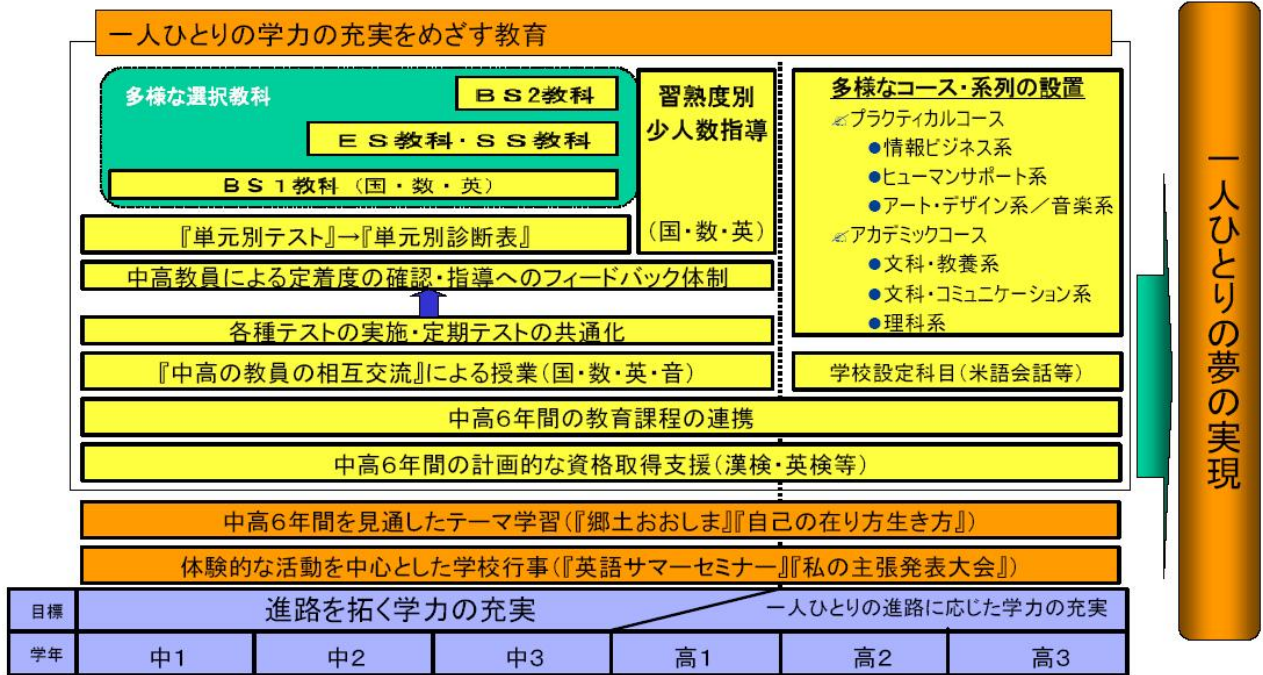


図1 基本コンセプトを具現化するための教育システム

(イ) 地域とともに生きる福祉教育の充実

- 福祉科との連携方法の研究

(ウ) 地域の生徒を地域で育てる教育の推進

● 6年間を見通したテーマ学習（「郷土おおしま」の取組）

- 学年に応じたテーマ学習の指導法及び評価法の研究
- フィールドワークを取り入れた調査方法の研究

● 体験的な学習を重視した学校行事

- 地域との連携を図りつつ、生徒の主体的な取組みを充実させる工夫
- 異年齢集団の中での円満な人間関係の育成
- 中高担当教員による役割分担の明確化と協力体制の強化

(エ) 6年間を見通した進路指導

- 中高6年間を見通した年間指導計画の作成
- 生徒一人ひとりが自己の在り方生き方を考え、主体的に進路決定を行うための段階的・継続的な支援
- 中学生を対象とした体験入学・キャリアセミナーの実施・充実

(オ) 6年間を見通した生徒指導

- 高校生を対象とした、中学校教員・養護教諭によるカウンセリング活動の実施
- 中高6年間の各クラスの学級経営方針・基準の統一への取組
- 自己実現のために必要な課題発見・解決力や、コミュニケーション能力・表現力の向上
- 各種合同行事における、異年齢集団の中での人間関係づくりへの支援

(2) 実践研究の課題

- 「周防大島高校が求める5教科の力」の活用方法の模索
- 中高一貫した生徒指導体制の充実

中学校修了段階での中学生の学力を確認できるようにするために、平成16年度より本地域独自で中高教員により作成してきた「安下庄高校が求める5教科の力」（通称；ガイドライン）を、本年度より「周防大島高校が求める5教科の力」に改称し、一層の改訂作業を進めた。本年度はこのガイドラインを用いて、中学校終了段階での基礎学力をいかに充実させるかということ課題とし、それを実現するために、ガイドラインの活用状況を夏休みと3学期に調査を行い、その活用方法を事例集にまとめ、各校に配布した。

また、周防大島高校の開校に合わせ、中高の生徒指導部が協力して指導体制をより充実させていく必要がある。新高校がスタートするということもあり、落ち着いた環境の中で学校生活を送れるように中高教員がサポートし、生徒が学習や学校行事、部活動等にしっかりと打ち込むことができた。

(3) 「確かな学力の向上を目指し、生徒の進学希望に応える教育の推進」および「生徒の進路希望に対応した選択幅の広い教育の推進」の取組

ア 中高二連携した特色ある教育課程の編成

○ 中学校における各教科年間指導計画の共通化

(ア) 取組

- 連携3中学校の各教科の年間学習指導計画の共通化
- 定期テストの共通化に対する中高教員の共通理解の徹底
- 中高間および中中間での教科担当者による連絡体制の強化

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 定期テストの共通化の導入とそのねらいについて、中高教員での共通理解を図ることができた。○ 高等学校を含めた連携校間での教科研修の機会が増え、指導方法の工夫など、研修意識が高まり、共通の課題や指導上の問題点を多角的に分析することができた。○ 基礎学力の定着度の確認および生徒の学習のつまずき箇所の発見が容易になった。	<ul style="list-style-type: none">○ 年間指導計画を学校・教科間で再確認し、計画的な指導の徹底を図る必要がある。○ 教科担当者間での連絡をより密にし、年間を通じて、より系統的・効果的な指導が実施できるよう努力する必要がある。

(ウ) 今後の展望

指導計画の共通化が始まって7年目になり、定期テストや指導計画の共通化が定着してきた。しかし、中高の教員一人ひとりがもう一度出発地点に立ち戻り、日々の授業実践における指導の質的向上をねらった当初のねらいを考え直すとともに、教科ごとに十分な協議を行い、年間指導計画や定期テストの共通化に関する研究や実践をより発展させる必要がある。

また、本年度は年間指導計画の様式も3校で共通化し、中学校間の連携を一層強くすることができた。今後、更なる分析を進めるためにも共通化する部分を絞り込み、分析した結果を日頃の授業活動にフィードバックすることも踏まえて授業に取り組んで行くことが必要になると思われる。

○ 中学校における多様な選択教科

(ア) 取組

- B S (Basic Study) 教科における、必修科目の補足的な学習の実施
- S S (Skill Study) 教科における、生徒の個性や特性の伸長
- E S (Expression Study) における生徒の自己表現能力の育成

B S 教科は、B S 1 と B S 2 に分けて実施し、必修教科の補足的学習に重点を置き、基礎学力の定着をめざしている。B S 1 教科については、国語・数学・英語の3教科を開設した。また、B S 2 教科については、社会・理科の2教科を開設した。

S S 教科では、音楽・美術・保健体育・技術家庭科等の教科を開設し、生徒の個性や特性を伸ばすことをめざした。

E S 教科においては、「表現活動」に重点をおき、生徒の自己表現能力を高めることをめざしている。

E S 教科では、高校の教育課程を見通し「情報」・「英会話」・「表現」の教科を開設した。「情報」では、I T 関係の学習を中心に実施し、情報収集やプレゼンテーション能力を養うとともに、学校生活をはじめ生活全般の中で、コンピュータを積極的に活用する態度を養う。「英会話」では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うとともに、英語で自己表現する能力を高める。「表現」では、国語だけでなく音楽・美術・保健体育等の教科まで幅を広げ、様々な自己表現能力を養う。(表1参照)

今年度より、各中学校の現状に柔軟に対応するため、E S 教科、S S 教科の開設教科を学校ごとに設定できるようにした。

教 科		内 容
B S 1	国 語	・基礎・基本の定着を図るための漢字学習・作文学習や劇、言葉遊び等の取組 ・教員作成の教材の活用
	数 学	・必修数学の復習や、基本問題を中心とした学習
	英 語	・単元テストや定期テスト等であつまずいた内容の繰り返し学習
B S 2	社 会	・必修社会の復習や教員作成の教材の活用
	理 科	・興味・関心を持たせる実験や問題集を利用した基礎・基本を定着させる学習
S S S	音 楽	・ギターや管楽器・ピアノなどの演奏技能の習得とアンサンブル
	美 術	・各自が選んだ制作方法での作品づくり
	保 体	・バドミントンやレクリエーションスポーツなどを通して運動の基礎を修得
	技 術	・決められた材料を利用した作品づくりや、コンピュータの基礎的な学習
E S	情 報	・インターネットを利用して情報を収集し、その資料をもとにプレゼンテーションを行うなど、コンピュータを活用した学習
	英会話	・ビデオ視聴・クイズやゲームによる基本的な日常会話の学習や、英語で自分を紹介するポスターづくり ・ALTや高校教員とのT・T（チーム・ティーチング）で実施
	音 楽	・民俗芸能ケチャの表現や手拍子でのリズム創作やアンサンブル、和楽器演奏や歌唱の取組
	美 術	・各自の課題に基づく創作活動
	保 体	・ダンスやボディーパーカッションによる身体表現活動

表 1 中学校における多様な選択教科

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<p>○ 生徒一人ひとりの能力を生かせる場面が多くなり、生徒の学習意欲が向上した。</p> <p>○ 選択教科の授業で高校教員とのT・Tを実施することで、高校での学習内容とのつながりを中学生が理解できる等、教科に対する興味・関心を高めることができた。</p>	<p>○ 指導内容や指導方法については、通常の授業との関連や位置づけも再検討する必要があると思われる。</p> <p>○ 高校教員が中心となって授業を展開する場合の評価についても検討の必要がある。</p>

(ウ) 今後の展望

それぞれの選択教科で身に付けさせる基礎学力やねらいを明確にし、生徒・教員ともに十分に理解して授業に取り組むことが重要である。そして、単なる通常授業の補完的な役割としての選択教科ではなく、BS・SS・ESのそれぞれの選択教科について担当教員で十分な協議を重ね、高校での関連する授業内容も考慮し、中高での継続した指導が行えるよう、検証していく必要がある。

また、選択授業の設定教科に幅を持たせたが、中中間での大幅なずれ等のないように慎重に協議をする必要がある。

○ 高等学校における習熟度別少人数指導

(ア) 取組

- 高校普通科1年次生を対象に、国語総合（古典分野）、数学Ⅰ、数学A、英語Ⅰで実施
- 普通科1年次3クラスを合併させ、生徒の理解度・到達度に合わせて、発展クラス（1クラス）・標準クラス（2クラス）・基礎クラス（1クラス）に分けて授業を展開
- 数学・英語において、週一回程度、連携中学校の教員が高校を訪れ（数学3名、英語3名）、T・Tにより、きめ細かな指導を展開

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 生徒の到達度に合った内容を学習させることができ、個人指導の時間もとれるので、大変有効である。○ 生徒がつまずきやすい箇所を事前に予測し、重点的に補足説明等を行うことができ、一人ひとりの理解度に応じたきめ細かな指導ができた。	<ul style="list-style-type: none">○ 習熟度別クラス編成では、生徒の理解度の差が大きく、生徒の学力差や個性に対応した指導を行うためにも可能な限り弾力的なクラス編成が必要である。○ 少人数であるメリットを生かした指導方法と評価の方法について、さらに協議を進めていく必要がある。

(ウ) 今後の展望

生徒一人ひとりの学力を向上させる手段として習熟の程度に応じて授業する方法は有効であると思われる。また、昨年度は、習熟度は基礎・発展の2段階であったが、本年度から更に細分化し、よりきめ細かな習熟度別少人数指導を実施していくことができた。細分化されたクラスで多様な生徒の学習をどこまでサポートできるか、全力で取り組んでいく必要がある。

また、生徒の進路希望に応じるために、数学・英語の習熟度クラス編成において、発展クラスを11月よりアカデミックコース進学者のみで編成し、進路に対する意識を高めることができた。このような、新しいクラス編成の方法も引き続き考えていく必要がある。

○ 高等学校における多彩なコース・系列の設置（普通科）

（ア）取組

- 生徒の進路や興味・関心及び保護者のニーズの多様化に対応するために、2コース・6系列を設置（図2参照）
 - ・「アカデミックコース」では、上級学校への進学をめざし、学究的な学習を展開
 - ・「プラクティカルコース」では、商業や福祉及び芸術などの、実践的な学習を展開

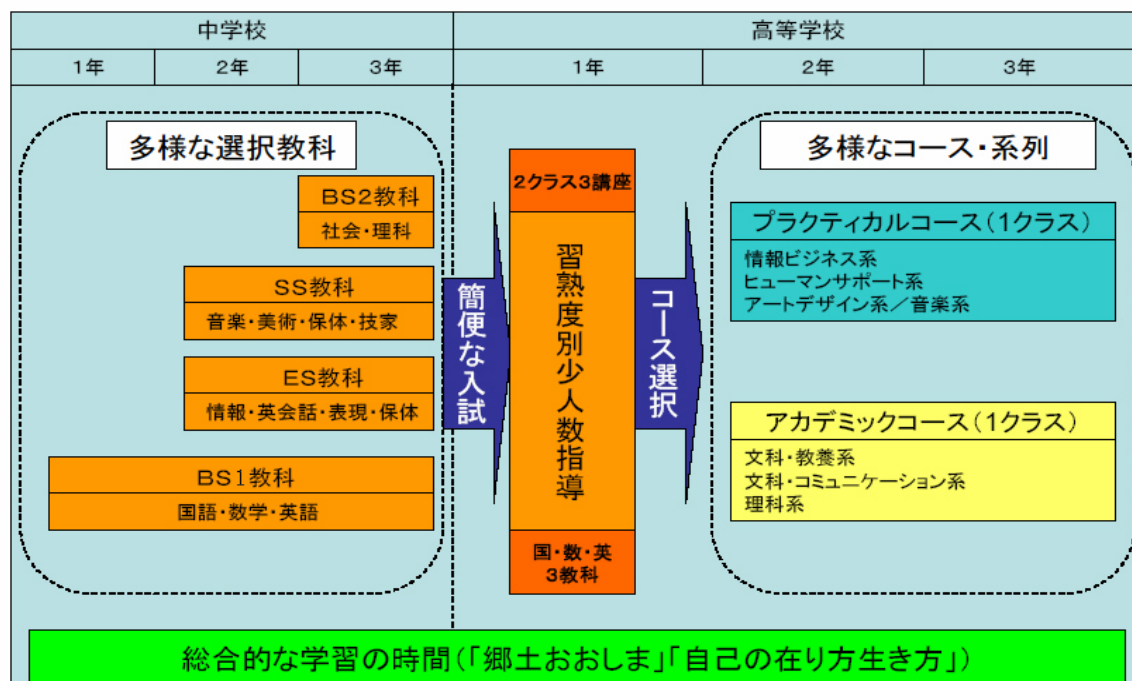


図2 中高6年間を見通した特色ある教育課程

イ) 成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒の多様な進路希望に対応でき、6年間継続した学習を行うことが出来る。 ○ 具体的に進路をしばり、夢の実現にむけて目標を設定できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 2コース6系列の多様な教科・科目を効率よく運用するための工夫・検討が必要である。 ○ 生徒の進路希望を1年次生によく考えさせる必要がある。

（ウ）今後の展望

高校における2コース6系列の設置により、中学生の多様な興味・関心に対応できるというメリットがある。しかし、同時に、実際の運用面で慎重に検討する必要がある。今年度は全学年・年次の生徒が新教育課程による授業を受講しており、授業運用面での課題を精査し、生徒の進路状況や社会情勢を十分に把握して、必要があればコース内容や選択授業の再検討を行うなど、効率的な運用をめざすことが求められている。また、多彩な選択授業を開講する上で、各授業を担当する教員の数が最大の検討課題となってくる。生徒一人ひとりの興味・関心に即した授業の開講が実現できるよう、教員定数を維持するなど、様々な教育環境を整える必要があると思われる。

イ 中高教員による指導方法の工夫・改善

(ア) 取組

- 交流授業における中高教員のT・Tを中心とした、きめ細かな指導の展開
- 中学校の通常授業における交流授業での指導方法の工夫・改善

(イ) アンケート実施とその結果

昨年度同様、今年度末に連携中学生と高校1年次生を対象に交流授業に関するアンケートを実施した。

a 中学校における交流授業について

Q1) 国語・数学・英語・音楽の交流授業について、どう思いますか。

		大変役に立つ		役に立つ		あまり役に立たない		役に立たない		合計
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
国語	H19	22	29.7%	44	59.5%	7	9.5%	1	1.4%	74
	H18	6	17.1%	24	68.6%	4	11.4%	1	2.9%	35
数学	H19	30	30.9%	51	52.6%	14	14.4%	2	2.1%	97
	H18	16	27%	36	60%	7	12%	1	2%	60
英語	H19	24	38.7%	35	56.5%	3	4.8%	0	0.0%	62
	H18	26	27.7%	54	57.4%	13	13.8%	1	1.1%	94
音楽	H19	17	23.6%	51	70.8%	4	5.6%	0	0.0%	72
	H18	24	28.2%	50	58.8%	8	9.4%	3	3.5%	85

Q2) 交流授業の良い点・悪い点を書いて下さい。

	良い点	悪い点
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・困っているときにヒントをくださる ・中学校では習わないような発展的な内容が学べる ・高校の先生に教わっていい経験になった ・専門性が高く身につけられる 	<ul style="list-style-type: none"> ・交流授業があるときとないときで単元が別々なのでごちゃごちゃになった ・早すぎてついていけなかった ・高校の先生でなくてもよいと思うことがあった
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・質問できる回数が増える ・よく分かる ・少しレベルの高い考え方も教えてもらえる ・高校で役に立つことを具体的に教えてもらえる 	<ul style="list-style-type: none"> ・話しかけられたときに緊張する。 ・席を見て歩いて教える以外にも何かやって欲しかった ・もっと教えてもらいたかった

英語	<ul style="list-style-type: none"> 英語を使う機会が多くなった (ALTの)本場の発音が生で聞ける 簡単な英会話が練習できる 	<ul style="list-style-type: none"> 英語ばかりで途中の話がわかりにくい 話すスピードがはやい
音楽	<ul style="list-style-type: none"> 良いところや悪いところを指摘してもらえる 本格的なこと(息づかいや強弱など)を教えてください 中学校の先生以外の目線(どうみているか)がよくわかる 普段の中学校の授業でやらないようなことも教えてもらった 	<ul style="list-style-type: none"> 発声練習が難しい 歌が多く立っている時間が長い

b 高校における交流授業について

Q 1) 国語・数学・英語・音楽の交流授業について、どう思いますか。

		大変役に立つ		役に立つ		あまり役に立たない		役に立たない		合計
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
連携中出身者	数学	1	5%	9	47%	9	47%	0	0%	19
	英語	5	28%	10	56%	3	17%	0	0%	18
連携中出身者以外	数学	0	0%	5	25%	9	45%	6	30%	20
	英語	0	0%	9	43%	7	33%	5	24%	21

		大変役に立つ		役に立つ		あまり役に立たない		役に立たない		合計
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
H19年度全員	数学	1	3%	14	36%	18	46%	6	15%	39
	英語	5	13%	19	49%	10	26%	5	13%	39

		大変役に立つ		役に立つ		あまり役に立たない		役に立たない		合計
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
H18年度全員	数学	9	21%	19	44%	8	19%	7	16%	43
	英語	4	14%	19	66%	2	7%	4	14%	29

Q 2) 交流授業の良い点・悪い点を書いて下さい。

	良い点	悪い点
数学	<ul style="list-style-type: none"> 中学校で教わった先生なので聞きやすい。 先生が2人いるので聞く機会が増える。 高校の先生に聞けないときに中学校の先生に聞ける 授業に集中できた 	<ul style="list-style-type: none"> 違和感がある(連携中以外の生徒) 中学校の先生にもっと積極的に参加して欲しい。(2人で授業をして欲しい) 連携中出身ではないから役に立たない。

英語	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校の時の内容を含めながら高校の内容が勉強できた。 ・先生が2人いるので聞く機会が増える。 ・知っている先生だと愛着があって聞きやすい。 ・（中学校の先生は）難しいことを言わないので役に立つ。 ・色々な教え方で学べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発展クラスにも先生に来て欲しい。 ・進むペースが遅くなる。 ・中学校の先生がT1をやってもよいのではないか。 ・もっと中学校の先生に来て欲しい。 ・あまり見られると恥ずかしい、気になる。
----	---	--

今年度の交流授業のアンケートの結果も、昨年度と同様に、高校での交流授業に対する高校生の評価について顕著な結果が現れた。連携中学校出身者の生徒で交流授業に対して5～8割の生徒が肯定的に捉えているのに対して、連携中学校以外出身者の生徒のうち6～8割の生徒が否定的に捉えていた。連携中学校の生徒が授業をT・T等2人で行うことに慣れているのに対して、連携中学校以外の生徒が2人以上の教員での授業に馴染めていないということが原因として挙げられる。

前向きに授業に取り組む姿勢は、授業内容の理解度の向上へつながる重要な要因であり、この点から考えても、中学校時に中高教員によるT・T指導を受けてきた連携中学校の生徒は、学力の向上につながる要因をより強く持っていると言える。交流授業のメリットを生かし、生徒の学力向上を目指すためにも、連携中学校から一人でも多くの生徒が周防大島高校へ入学することが望まれる。

また、中学生については交流授業に対する生徒の評価は高かった。高校の教員がより専門的なことを教えてくれるということからも、中学生の向上心の高さも伺われる。中にはもっと高校の教員が前にたって教えて欲しいという積極的な意見もあった。

このアンケートの結果により、来年度以降の交流授業についても中学校・高校の教員でよく話し合いながら、より実りあるものにしていくことが必要とされる。

ウ 基礎学力の定着度の確認方法および指導へのフィードバック

(ア) 取組

- T・Tによるつまずき箇所の発見
- 「教科別診断表」や「単元別テスト」を活用した定着度の確認と指導へのフィードバック
- 定期テストの共通化によるデータを活用した資料の作成とフィードバック方法の検討
- 実力テストの共通化による度数分布表の作成と生徒へのフィードバック

連携中学校から本校へ進学を希望する生徒には「連携型中高一貫教育に係る入学者選抜」において、面接、小論文等によるいわゆる『簡便な入試』を実施しているが、中学・高校生の学力をきちんと保証し、地域や保護者にも不安を与えないという意味から、少なくとも学力検査の行われていた5教科については中高が連携した一人ひとりの学力の定着度の把握が必要とされ、その方法についての研究を行ってきた。

学習内容の定着度の確認とそのフィードバックは、その間隔が短いほど効果的であると考えられる。しかし、その場で教えたことの定着度を確認しその場で理解不十分な生徒に指導を加えることは、実際問題として難しい。しかし、T・Tであれば、一人の教員が授業を進行している間に一方の教員が机間指導等を行って生徒のつまずきを早期に発見し、指導することができる。

中学校では、国語・社会・数学・理科・英語の5教科について、単元終了ごとに「単元別テスト」を実施し、基礎的・基本的事項にしぼって、より短いスパンでの定着度の把握を行い、指導へのフィードバックを迅速化することによって生徒の基礎学力の向上に努めている。上記5教科の「定期テスト」も定着度の確認に活用している。連携中学校では、定期テスト問題の一部を共通化し、定着度の確認をするための成績資料作成を中1から高1まで一貫して行うことにした。定期テストの分析を行うために、中高で協力して「教科別診断表」という成績資料を作成している。（表2参照）

		得点						正答率								
配点		20	20	20	20			80		大問 1	大問 2	大問 3	大問 4	大問 5	大問 6	総合
目標ボーダー		10	10	8	8			36								
生徒番号	標準 得点	大問 1	大問 2	大問 3	大問 4	大問 5	大問 6	総合 点 等	単 元 名	○	△	◇	□			
									観 点	技 能	知 識 ・ 理 解					
a990301	59	20	14	16	14			64		100	70	80	70			80
a990302	49	10	8	14	8			40		50	40	70	40			50
a990303	52	13	14	13	12			52		65	70	65	60			65
a990304	65	20	17	19	13			69		100	85	95	65			86
a990305	53	12	14	18	9			53		60	70	90	45			66
a990306	64	20	15	18	14			67		100	75	90	70			84
a990307	45	7	6	10	8			31		35	30	50	40			39
a990308	48	14	10	7	6			37		70	50	35	30			46
a990309	56	16	18	14	14			62		80	90	70	70			78
a990310	57	19	14	13	17			63		95	70	65	85			79
a990311	53	12	15	14	12			53		60	75	70	60			66
a990312	58	18	16	18	11			63		90	80	90	55			79
a990313	65	19	18	16	18			71		95	90	80	90			89
a990314	63	17	17	15	19			68		85	85	75	95			85
a990315	68	19	18	18	20			75		95	90	90	100			94
学校	合計点	236	214	223	195			868								
	人数	15	15	15	15			15		15	15	15	15			15
	平均点(通過率)	15.7	14.3	14.9	13			57.9		79	71	74	65			72
	ボーダー未達成人数	1	2	1	1			1								
	最高点(率)	20	18	19	20			75		100	90	95	100			94
最低点(率)	7	6	7	6			31		35	30	35	30			39	
連携校	合計点	1056	807	831	585			3279								
	人数	50	50	50	50			50		50	50	50	50			50
	平均点(通過率)	16.2	13.2	16.6	11.7			65.6		81	66	83	59			66
	ボーダー未達成人数	3	5	4	2			3								
	最高点(率)	20	20	20	20			100		100	100	100	100			100
最低点(率)	5	5	5	4			25		32	25	20	20			25	

表 2 教科別診断表

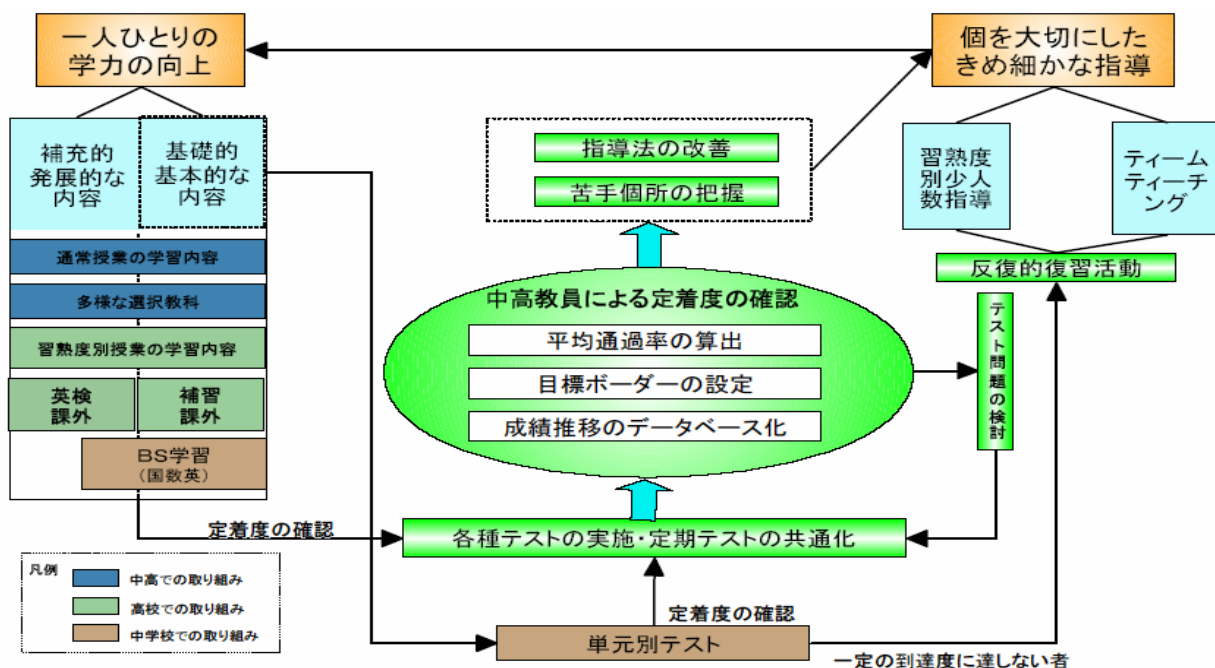


図3 定着度の確認と指導へのフィードバック体制

さらに、長いスパンでの学力の定着度を確認するために中高で「基礎力診断テスト」を実施している。以上のような各種テストを用いた学力の定着度の確認方法とそのフィードバック体制を図示したのが上図である（図3参照）。

また、すべてが数字のデータである「教科別診断表」をより効果的に活用し、日頃の授業の指導力向上に資するために、担当教員の採点上の気づきをまとめた「定期テストの感想・気づき」という一覧表も「教科別診断表」と同時期に作成している。これは、生徒のつまづき箇所を発見しやすくするとともに、生徒の不得意分野の解明と日頃の指導との関連性を教員が自己評価できる機会にもなっている。教科別診断表の分析については主に、合同研修会の教科別研修会において、中高教員で行っている。

さらに、11月に実施される中学校2年生の県共通テストと同時期に1、3年生においては実力テストを実施し、3中学校でデータを集約し度数分布表を作成して生徒個人に配布することで、中学生はより大きな集団の中で自分の位置を確認できる機会となった。中学校教員からは、中学生の学習に対する意識が向上し大いに刺激になったと、大変好意的に受け止められている。また、中学校教員自身も自らの指導方法を改善する良いきっかけとなっているようである。学習は各個人で行うべきもので、競争心を煽りすぎると逆効果になってしまうが、母集団の小さな学校では、自らの現状を知り学習意欲をさらに高めていくことが非常に難しく、今回の度数分布表の作成および生徒への配布は大変有効であり、引き続き実施していきたい。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ T・Tの実施により、その場で理解が不十分な生徒に即座に対応できる。○ 中高の教員間で、学力の問題について具体的な資料に基づいた話し合いができるようになった。○ 度数分布表の作成および配布により、中学生・中学教員ともに大いに刺激となった。	<ul style="list-style-type: none">○ フィードバックの効果的な方法について、さらに研修を深める必要がある。○ 基礎学力が他地域と比べてどのような傾向にあるのかを検討する必要がある。○ 高校における、データの有効的な活用方法の検討が必要である。

(ウ) 今後の展望

現在、中高の5教科（国語・社会・数学・理科・英語）の担当教員を中心にデータの入力や分析を行っており、データの蓄積を行い、日々の指導の改善にフィードバックできるシステムを作り上げている。これにより、個人の成績の推移を取り出して活用することができ、生徒にとっても教員にとっても、学習を進める上での指針になる。また昨年度より作成している「定期テストの感想・気づき」を補完的に用いることで、数字の羅列になりがちなデータの分析をより意味のある生きたデータとすることが考えられる。引き続き、データの活用の取組と一層の工夫・改善が課題である。

また、実力テストのデータ集約に度数分布表を加えることで、より効果的に指導へのフィードバック体制をより強固なものにすることができると期待されている。今後さらに中高教員間での検討を重ね、生徒の学習の定着度をさらに図っていくためにも、以下に挙げる「周防大島高校が求める5教科の力」との関連性も探りながら、各教科で協議していく必要がある。

エ 「周防大島高校が求める5教科の力」の活用

(ア) 取組

- 中高教員による「周防大島高校が求める5教科の力」（通称：ガイドライン）活用方法の模索

夏休みに行った第3回合同研修会と3月におこなった第5回の合同研修会の際にガイドラインの活用状況・活用の場面や活用方法を調査し、お互いの活用方法を知り、今後の活用の参考にするために「ガイドライン活用事例集」を作成した。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 中高教員間で基礎基本となる学力についての議論が活発に行われた。○ 中学校と高校での指導の連続性や一貫性に対する意識が向上した。○ 活用状況を事例集にまとめることでガイドラインに対する教員の意識の高揚も図れた。	<ul style="list-style-type: none">○ ガイドラインで示された学習項目を今後どのような形で評価し、指導に生かしていくのかが大きな課題である。○ ガイドラインの継続的な活用が最大の課題である。

(ウ) 今後の展望

ガイドラインの活用事例集を完成させたことで、来年度以降のガイドラインの活用も活発になることが予想される。高校においても中学生に春休み学習会で活用しているが、高校での学習の基本となる中学校の内容が確認できるよう、高校生への意識の喚起も必要となってくるかもしれない。

今後も今年度の実施状況を十分に踏まえ、中学生にとってより効果的で活用しやすいガイドラインを目指して改良を加えていきたい。

オ 6年間を見通した計画的な資格取得

(ア) 取組

- より専門的な資格取得のサポートの実施
 - ・ 商業科 … 「情報処理検定」「ワープロ実務検定」
「簿記実務検定」「珠算・電卓実務検定」
「商業経済検定」(全て財団法人全国商業高等学校協会主催)
 - ・ 家庭科 … 「全国高等学校家庭科食物調理技術検定」
「全国高等学校家庭科被服製作技術検定」
「全国高等学校家庭科保育検定」
「訪問介護員」「居宅介護従業者」

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 目標が明確になるので、主体的に学ぶ姿勢を育むことができる。○ 上位資格へのステップアップを果たすことで、生徒に達成感・充実感を味わわせることができ、より積極的に授業に取り組むことができる。○ 訪問介護員の資格については、実習における外部とのかかわりが多いため、公共心や職業に対する意識の高さがみられる。	<ul style="list-style-type: none">○ 連携3中学校の生徒数が減少し、男女共修や他学年合同の授業が増えてきているため、指導計画、評価の共通化を工夫しなければならない。○ 検定の合格を目標とした授業にならないよう、授業研究に努めなければならない。○ 家庭科を履修していない生徒の受検要望が増えてきたことへの対応を考えていかなければならない。

(ウ) 今後の展望

検定は、生徒に達成感・充実感を体験させることができるため、さらなる学習への励みとなるものである。また、結果は生徒の学力をはかるのみでなく、教員の授業の成果を客観的にはかる材料となるので、授業研究の糧にもなり、教育効果は大きいと言える。今後も、教科指導と検定対策とのバランスを十分に考慮し、日々の授業研究に努めるとともに、検定受検の意義を早い段階から周知徹底させ理解させるための取組がより一層必要になると考えられる。

カ 中学校修了後の「ゆとり」を生かした指導の取組

中高一貫教育によって生じる「ゆとり」については、様々な視点に立った捉え方があるように思うが、本地域では、連携中学生の中学校修了後から高校入学後の学習にスムーズに移行できるよう、効果的な「ゆとり」の活用方法について研究を行った。

(ア) 取組

中学校修了後入学までに2回、連携3中学校からの入学生に対して、数学科と英語科の教員による学習指導を「春休み学習会」として行った。

今年度は、高校の教員だけでなく中学校の教員とも協力して、一人ひとりにきめ細やかな指導ができるよう配慮した。

a 数学科の取組

数学科では、ガイドラインにより事前に課題を提示し、2時間の授業を「テスト」と「解説」の2部構成で展開した。特に、最近の入学生は計算力に課題があることが多いので、まずは数や文字の四則演算がしっかりとできるように取り組んだことは、大変有効であった。

b 英語科の取組

昨年度、基本的な単語の学習から初歩的な文法事項まで指導内容をいくつかのステップに分け、各段階のチャレンジテストを受けて合格すれば次のステップの学習が行えるよう、個人の到達度・理解度に応じた指導を行った。また、必要に応じて、グループ内での一斉指導形式で補足説明を行い、生徒が積極的に参加できるよう工夫して指導を行った。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 中学校教員にも指導に加わってもらい、一人ひとりの生徒にきめ細かな指導が徹底できた。○ 入学生の苦手とする項目が、中高教員で共通理解できた。○ 学習習慣を確立する一助となった。	<ul style="list-style-type: none">○ 各チャレンジテストで取り上げる学習項目について、検討が必要である。○ 本年度作成したガイドラインの活用方法を検討していく必要がある。○ ガイドラインのどの項目を特に取り上げて指導するのか、また、どの程度まで指導していくのか、中高教員で十分な協議が必要である。

(ウ) 今後の展望

中学校から高校の学習へのスムーズな移行に関して、この学習会で各自の弱点を見つけ出ししておくことは非常に大切である。そのためにも、学習会を通して中高教員が生徒の学力を十分に把握し、適切な指導が行えるような体制を整える必要がある。今年度は中高教員が役割分担をして、入学生一人ひとりにきめ細かな指導を行うことができた。今後は、更に指導形態や指導内容に工夫を加え、連携中学生にとって高校生活への円滑な橋渡しができるよう、計画的に指導を計画・実践できるよう検討していく必要がある。

(4) 「6年間を見通したテーマ学習」の取組

～ 「郷土おおしま」の取組 ～

ア ねらい

「総合的な学習の時間」において、「郷土おおしま」を「6年間を見通したテーマ学習」として取り組んでいる。その主なねらいは次のような能力や態度の育成にある。

- 自ら課題を見つけ、自ら学び、主体的な判断によってよりよく問題を解決しようとする資質や能力の育成
- 学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度の育成
- 地域社会と関わりながら、郷土についての理解を深め、郷土の歴史や文化の継承と郷土を愛する心の育成

イ 中学校における取組

各中学校によって、具体的な取り組み方については、様々であり、学校の規模、生徒の様子、環境に合わせた形で行っている。以下は本年度の安下庄中学校の取組についてである。

(ア) 研究の形態について

本年度の「郷土おおしま」では、「自然と環境」「歴史と文化」「暮らしとふれあい」「交流とこれから」という4つの大きな枠組みに分けて実施した。

このうち、1年次生は「自然と環境」について課題を設定し、2、3年生は「歴史と文化」「暮らしとふれあい」「交流とこれから」の3テーマの集団に分かれ、その中で個人テーマを設定し、資料収集、フィールドワーク、考察等を行った。

(イ) ふるさと講演会の実施

2、3年生の課題設定については、どのテーマを選び、その中で個人テーマをどう設定するのかを考える必要がある。その前に、生徒たちに自分たちが住んでいる大島の現状をしっかりと理解させた上で、生徒たち自身が感じた疑問や課題意識をもとに絞り込んでいくことが望ましい。したがって、課題の設定にあたっては、ふるさとを理解するために、各テーマにかかわりの深い方を講師に招いて「ふるさと講演会」を3度実施した。

特に、2度目の講演会は、「大島の歴史と文化について」「大島の福祉について」「大島の産業について」の3つのテーマから、自分の興味関心のあるテーマを2つ選択して聴講し、大島に関する見聞を広げ、個人テーマ設定のヒントとした。

ウ 高等学校における取組

(ア) 資料館めぐり

1年次生を対象として大島郡についての理解をより深めるために、郷土にかかわりある資料館を訪問して学習した。

Aコース（旧東和町方面）… 陸奥記念館、周防大島文化交流センター

Bコース（旧大島町・久賀町方面）… 日本ハワイ移民資料館、

久賀歴史民俗資料館

(イ) 特別講義の実施

周防大島町の中で、様々な分野で活躍されている方を講師に招き、専門分野の紹介や周防大島町の魅力などについての特別講義を1、2年生対象に実施した。今年

度は、「『郷土おおしま』にどのように取り組むか」と題した講演会を行い、研究テーマ設定の視点や地域調査の方法などについて理解を深めることができた。また、選択講義として、「地元の特色を生かしたお菓子作り」「みかんとその仲間について」「『120%マジで生きるとジブンが見えてくる』」など、郷土にかかわる各テーマを選択して聴講した。

(ウ) 職場体験の実施

研究テーマをより身近なものとして捉え、郷土に対する理解をより一層深めることを目的として、2年生全員が周防大島町の約20の事業所や施設を訪問して、1日の職場体験を実施した。これは、「郷土おおしま」を研究していく上で一番の課題に挙げられてきたテーマの決定をより効果的に行うことがねらいであった。また、仕事を体験させてもらうことで、将来の進路について見つめ直す機会となることも期待される。

(エ) グループ学習

各自テーマを設定し、ある程度夏季休業中に調査が進んだ段階で、2学期に学年ごとに、テーマ別にグループ分けし、研究を進めた。1、2年生は、テーマごとに大きく次の3つのグループに分けて学習する機会を設定した。

- Aグループ 歴史・文化
- Bグループ 福祉・医療・産業
- Cグループ 環境・自然・その他

エ 評価について

(ア) 評価の観点

中学校	1 学年	○主体的に課題を発見する力 ○ふるさと「おおしま」を大切にする態度 ○情報の集め方・調べ方
	2 学年	○主体的・創造的な態度 ○多角的・総合的な考察力 ○人・地域社会との関係力
	3 学年	○主体的・実践的な態度 ○課題を解決する力 ○自己の在り方生き方を追求する力
高等学校	1 年次	○各自の興味・関心に応じたテーマを設定し、調査・研究を中心に進めて成果をまとめることができたか。
	2 学年	○地元で働く人々の生き方を参考にして、各自の興味・関心に応じたテーマを設定し、調査・研究を進めてパソコンでレポートを作成する。その際に考察を加えて自分なりの「提言」も考えて発表することができたか。
	3 学年	○自己の在り方生き方を見つめ直し、進路研究を深めることができたか。

(イ) 生徒の自己評価

毎時間の学習を記録した用紙をポートフォリオ形式で各自綴じていき、課題意識を持たせている。3年間の総合的な学習の時間の内容を1冊のファイルに記録することで、中学校での学習の積み重ねを意識できるように配慮した。また、学年の発表では、生徒同士による相互評価も取り入れた。

(ウ) 教員による評価

毎時間の学習の記録用紙、レポート、発表会の内容を中心に評価する。

オ 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 調査の結果から現状における問題点について、自分なりの考察を加えることができた。 ○ 郷土への関心が深まり、地域に目が向くようになった。 ○ インターネットや文献からの情報のみならず、現地調査を行ったり、地域の方にアンケートを取ったり、調査内容を写真に収めたりするなど、創意工夫を凝らした研究が見られるようになった。 ○ フィールドワークを積極的に行うことによって、「総合的な学習の時間」に対する地域の理解度が高まった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「郷土おおしま」という大きな枠があることによって、生徒の興味が限定されてしまいがちである。「郷土おおしま」を基に、発展した課題を見つける必要がある。 ○ 生徒を十分に支援できるだけの教員の力量を高めていく必要がある。 ○ インターネットや文献による調査研究のみで終わらないよう、地域のネットワークをうまく活用する工夫が必要である。

カ 今後の展望

本来、「総合的な学習の時間」はさまざまな学習活動との連携を図りながら進めていくべきである。そのためにはまず、指導する側の協力体制と幅広い視野に基づいた様々な働きかけが求められる。現行の教育課程において、どうすれば有効に授業時間を活用することができるのか、また、教員間の協力体制をどのように図っていくのが問題となる。

また、今後さらに「郷土おおしま」の時間を充実させるためには、生徒自身の興味・関心や疑問、驚きなどを土台にして、「自己の生き方の自覚」に結びつくような課題や活動を設定していくことが最も重要であると思われる。

さらに、宮本常一が用いた研究方法であるフィールドワークに対するノウハウは、講演会や文化交流センターの活用などにより、生徒の間に定着しつつある。今後は、どうすれば生徒たちが得たフィールドワークのノウハウを実際の研究に生かし、さらに研究を深めていくことができるのかを、中高間での指導の連続性も視野に入れて協議を重ね、実践していきたい。

(5) 「体験的な学習を重視した学校行事」の取組

ア ボランティア活動

当初は「ふれあいクリーン作戦」として中高合同で海岸清掃を実施していたが、平成16年度からは「ボランティア活動」に変更し、それぞれの地域において、学校・部活動または個人単位で行えるボランティア活動を積極的に奨励し参加している。「ボランティア活動」への名称変更に伴い、実施形態も変更されたため、この活動のねらいも見直すべきだという声上がり、今年度は、以下のようなねらいを設定した。

(ア) ねらい

○ 中学校

身近なボランティア活動を通して、地域社会の一員として支え合い協力していこうとする思いやりの心を育て、学校の級友や地域の人々に主体的に関わろうとする態度を養う。

○ 高等学校

身近なボランティア活動に主体的に参加することで、幅広い年齢層の人との関わりを持ち、豊かな人間関係の醸成を図るとともに、集団の一員としての自覚と責任感を育成し、郷土を愛する心を育てる。

(イ) 各校の取組

学 校	主 な 内 容
安下庄中学校	○町主催の花火大会後のゴミの分別作業 ○学校周辺のゴミ拾い
日良居中学校	○学校近郊の海岸清掃活動 ○日本テレビ主催のチャリティー募金活動 ○県立養護学校の児童生徒のプール活動の介助
東 和 中 学 校	○大島郡陸上競技大会での補助員 ○日本テレビ主催のチャリティー募金活動 ○サザンセトロードレースの補助員

安下庄高校 周防大島高校	<ul style="list-style-type: none"> ○町主催の花火大会後のゴミの分別作業 ○日本テレビ主催のチャリティー募金活動 ○日良居中学校秋季大運動会での運営補助 ○各種福祉施設・病院などでのボランティア ○サザンセットロードレースの補助員 <p style="text-align: right;">他多数</p>
-----------------	---

(ウ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 各学校に担当者を置くことにより、学校間のボランティア活動に関する情報交換が頻繁に行えるようになった。 ○ 各校で実施したボランティア活動の情報を集約し、次年度に向けての参考にすることが出来る。 ○ 部活動などの小さな単位で活動が実施でき、迅速に対応することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中学生・高校生が共同で作業する場が持てるように、さらに積極的に活動の場を探っていく必要がある。 ○ 小・中・高での連携も視野に入れていく必要がある。 ○ 生徒への事前の情報提供を徹底し、自分の興味に応じた活動を幅広く選択できるように工夫すべきである。

(エ) 今後の展望

中高で定めた「ねらい」によって、中学校・高校それぞれのボランティア活動に積極的に取り組むようになってきたと思われる。今後は町の社会福祉協議会とも情報交換をしながら、より地域に密着したボランティア活動を模索し、中高間のみならず、小・中・高、ひいては周防大島町全体を巻き込んだ大きなボランティア活動の流れが醸成されることを願っている。

また、中学校・高校それぞれが、ボランティア活動後に生徒に感想を書かせているが、一人の生徒が中学1年生から高校3年生までの6年間に行ってきたボランティア活動を記録できるものを作成し、中高6年間継続して持たせてみてはどうか、という案が出ていた。それを受けて、本年度は東和中学校の3学年で試行的に生徒にボランティア活動の感想をまとめて書かせてみた。今後は、中学校・高校で十分な協議を重ね、中高6年間での一貫した支援体制を考え直してみる必要がある。

イ イングリッシュキャンプ（英語サマーセミナー）

(ア) ねらい

周防大島高校近郊の中学生2, 3年生及び、安下庄高校・周防大島高校の生徒が、県内の外国語指導助手との英語を使用したさまざまな活動を通して、実践的語学力や積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度及び異文化を理解し尊重する態度を身につけることを目的とする。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 自分の英語が通じた喜びを中学生に実感させることができた。○ 中学生が英語学習に熱心に取り組む契機となっている。○ 複数回参加している生徒が、前回と比べ自分の英語コミュニケーション能力の上達を感じていた。○ A L Tと生徒の手紙交換では、夜遅くまでかかって積極的に多くのA L Tに手紙を書いた生徒もいた。また、A L Tから自分宛の手紙をもらい、喜ぶ生徒の姿が見られた。	<ul style="list-style-type: none">○ 現在の活動で更に見直しや改善を進め、参加者が楽しんで英語を学ぶことができる活動、また参加者の相互理解を深めることを更に可能にする活動にしていく必要がある。○ より多くの連携中学校の生徒に参加してもらうため、活動をよりよく知ってもらう努力が必要である。○ 事前・事後を含めて、参加教員のより綿密な協議が必要である。

(ウ) 今後の展望

毎年、新たなA L Tも加わり、生徒のみならず教員にとっても得るものが多いセミナーとなっている。今後、中学生、高校生の学習段階に応じ、どの参加者も楽しく英語を学ぶことができる活動を考える必要がある。本校のセミナーはA L Tと参加生徒の数がほぼ同数で、A L Tを身近に感じる機会が多いことが特長として挙げられる。そのため、A L Tとマンツーマンでポスターを作ったり、活動を行ったりすることが可能となっている。今後もこの特長を生かし、生徒がA L Tを身近に感じることで英語・異文化により興味をもたせることができるように、活動を改善していきたい。また、参加者の相互理解がより深まるような活動内容を考えていきたい。

ウ ふれあいマラソン大会

(ア) ねらい

マラソンを通して、心身の健全な発達や健康の保持増進を図り、自己管理に努める。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 中学生は高校生を目標にし、高校生は中学生に負けられないという気持ちで走り、また連携中学校生同士も負けられないという気持ちで走ることで、生徒のやる気を呼び起こすことができた。○ 地域の人達が沿道から声援を送り、生徒は地域とのつながりを実感することができた。	<ul style="list-style-type: none">○ 大会当日の沿道での交通整理など、教職員・保護者・地域の人達で協力して、生徒の安全確保に努める必要がある。○ 大会の運営全般について、中高教員で十分に検討していく必要がある。○ 来年度以降、枠組みが広がることによって実施が可能かどうか検討していく必要がある

(ウ) 今後の展望

第8回ふれあいマラソン大会は、連携4校の教職員や保護者、地域の方々の御協力により、無事終えることができた。

連携中学校出身の高校生は、中学校3年間の記録が蓄積され、過去の記録を参考にした目標の設定をスムーズに行うことができた。また、連携4校でレースを行うことで、日頃顔を合わせないもの同士がお互いを意識し、良い緊張感を持ってレースに挑み、記録向上につながっている。

保護者や地域の方々が、安下庄地区を爽やかに駆け抜ける生徒達に温かい声援を送っている姿をいたる所で見ることができ、この行事も8回目を迎え、地域に定着してきたように思える。

連携4校が一堂に会し、マラソン大会を実施することは、小規模校の3中学校にとって意義が大きく、今後、さらに中高一貫教育を地域にPRしていく必要がある。

また、来年度以降は久賀中学校も枠組みに加わるが、規模の拡大により現在のコースでの実施が可能かどうか、検討する必要がある。



中高生が健脚を競い合うマラソン大会

エ ふれあいみかん収穫作業

(ア) ねらい

- 中学生と高校生の交流を促進する。
- 地域の産業を理解し、勤労の貴さを体得し、職業観を確立する。

(イ) 成果と課題

今年度は雨天により当日、予備日ともに中止という残念な結果に終わったが、雨天時及び途中から雨が降ってきたときの対応等さまざまなが現れた。

(ウ) 今後の展望

今年度も引き続き、中高での業務の分担はしっかりできており、準備もスムーズに行われた。

来年度、統合により生徒数の増加が見込まれ、また、校舎も2校舎に分かれる。参加生徒数の増加に伴う農家の募集も行っていかねばならない。

例年農家の方には大変感謝され、来年度もお願いしたいと大半の農家の方に言っている。引き続きふれあいみかん収穫作業の円滑な実施に取り組みたい。

オ 私の主張・郷土おおしま発表大会

平成13年度から実施している「郷土おおしま発表大会」は今年で7年目を迎えた。この発表大会は、中高合同による学校行事として定着し、中学校・高校の生徒会執行部が司会進行等を務めて大会を運営している。

(ア) ねらい

- 「私の主張」発表大会
他学年や同学年の生徒の発表を通して、自己の在り方生き方を考え、自己をいっそう成長させようとする意欲や態度を育む。
- 「郷土おおしま」発表大会
他の連携校生徒の発表を聞くことで、取組の様子を知るとともに、自らの研究に役立てる。

(イ) 発表内容

a 「私の主張」発表大会

演 題	学 校	内 容
私にとっての駅伝	東和中学校	駅伝を通じて学んだあきらめない気持ちと仲間の大切さ
バレー部の活動から学んだこと	日良居中学校	バレー部の活動を通して生まれる友情や一生懸命取り組む姿勢の大切さ
食品偽装と自分の役割について	安下庄中学校	食品偽装問題を通して自分でできることの提言
地球環境について	周防大島高校 1年次	地球環境問題について、自分たちにできることの提言
目標を現実	安下庄高校2年	陸上競技にかける思いと、目標実現のための決意
年頭に当たって	安下庄高校2年	現代における様々な問題提起と自分のあり方について

b 「郷土おおしま」発表大会

演 題	学 校	内 容
東和遺産登録までの道のり	東和中学校	自分たちが残したい景観等を「東和遺産」として登録。そのための1年間の研究結果を発表
浮島探検記	日良居中学校	浮島を訪れて、自然や産業等の様々な研究とその考察
介護サービスの様子	安下庄中学校	介護サービスについて1年間研究や体験をした成果を発表。手話合唱やケリーパッド作りなども盛り込まれた
ごみ処理について	周防大島高校 1年	周防大島のごみ処理の現状とそこから派生する問題点について

宮本常一の写真からⅡ	安下庄高校2年	昨年に引き続き宮本常一が昭和30～40年代に撮影した大島の写真と現在を比較し、人々の暮らしの変遷を検証
------------	---------	---

(ウ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 発表大会に向けて全員が身の回りのテーマについてあらためて考え、自分の意見をまとめたり、考察を加えたりする機会となった。 ○ 発表を聞くことによって、各自が新しい視点に気づいたり、自分自身を振り返ったりする機会となった。 ○ 中高の生徒会が合同で司会を担当することで、中高の役割分担が明確化し、協力体制が強化された。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教育課程の関係上、調査研究の時間の確保がなかなか難しい中、学年進行によって研究発表内容そのものをどのように深めていけるかについて依然課題が残る。 ○ 来年度からの久賀中学校との連携に向け、総合的な学習の時間の持ち方等、綿密な打ち合わせが必要である。



中高の生徒会が合同で司会を担当



中学生の発表の様子

(6) 「6年間を見通した進路指導」の取組

進路指導部では、生徒一人ひとりが自己の在り方生き方を考え、将来に対する目的意識をもって主体的に進路を決定し、生涯にわたる自己実現を図っていくことができる能力や態度を育成することを目標としている。そして、生徒一人ひとりの夢を実現させるために、次の2点を主眼としている。

- 生徒一人ひとりが具体的な夢を思い描ける力を養うこと
- 自分の夢を実現する方策を知り、継続的に努力する姿勢を養うこと

ア 進路指導目標

- 中高6年間を見通した段階的・継続的な学習活動やテーマ学習を通して、自己の特性や適性について理解させ、自己の在り方生き方を考えさせるとともに、各自に応じた具体的な進路設計をさせる。
- 進路実現のためには主体的な学習が必要不可欠であることを自覚させ、日々の学習習慣を確立させ、一人ひとりの学力の向上を図る。
- 様々な体験学習に積極的に参加することによって進路実現への意欲を高めるとともに、社会的視野を広げ職業観・勤労観を培う。
- 自己実現に向け、継続的な努力を続ける姿勢を育てる。

イ 中高6年間の指導計画

	目標	学習内容	テーマ学習・体験的学習
中学1年	中学校の生活や学習内容を知り、将来の夢や生き方を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶことの目的と意義を理解し、中高一貫教育等の制度と機会を知る ・中学校生活に慣れるとともに、心身の健康と安全な生活の実践力を身につける ・意欲的計画的に学習に取り組む姿勢を身につける 	オリエンテーション
			ボランティア活動
			自己の在り方生き方
			BS学習
中学2年	自分の特徴や適性を知り、自分の力を高めながら、進路計画を立てる	<ul style="list-style-type: none"> ・職場体験等を通して、働くことの目的と意義を理解し、自分の進路計画を立てる ・自己を見つめる手だてを探り、集団と自己のかかわりについて考える ・学習の悩みに対する解決方法を探り、自分にあった学習方法を考える 	職場体験
			ボランティア活動
			自己の在り方生き方
			BS学習
中学3年	自己の在り方生き方を考え、適切な進路を選択する	<ul style="list-style-type: none"> ・将来に対する具体的な目標を立て、夢の実現をめざすための高校生活を展望する ・先人(先輩)の姿に学ぶことにより、自他の不安や悩みの解決方法を探り、自己の在り方生き方について考える ・学ぶことの目的を明確にし、その姿勢の習慣化を図る 	高校見学、体験入学
			ボランティア活動
			自己の在り方生き方
			BS学習

高校 1年	自己理解を深め、将来に対する明確な目標をもつ	<ul style="list-style-type: none"> ・こうなりたいという自分の将来像を描いていく過程において、自己の特性や適性を理解する ・将来の進路を見据えた科目選択の能力を身につける ・主体的継続的な学習の定着を図り、自分の学習スタイルを確立する 	新入生セミナー
			進路講演会
			出張講義
			ボランティア活動
高校 2年	自分の目標を実現するための明確な進路計画を立てる	<ul style="list-style-type: none"> ・職場体験等を通して、社会に対する視野をさらに広め、将来設計について考える ・学校生活を見直し、校外活動等へ積極的に参加することにより、自己と社会のかかわりについて考える ・自分の進路に向けて、基礎学力の定着と応用力の養成を図る 	職場体験
			進路講演会
			出張講義
			ボランティア活動
高校 3年	自分で描いた将来像に基づいて自己実現を図る	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の在り方生き方をふまえて夢の実現を追求する ・具体的な志望動機に基づいて学習を充実させる ・卒業後の新たなスタートにチャレンジしようとする意欲を高める 	進路講演会
			オープンキャンパス参加
			ボランティア活動

ウ 取組

○ 中学校での中核的な取組

1年	職業しらべ	自分の適性に気づき、身近な人の職業について調べることによって、将来の進路を計画しようとする態度を養う
2年	職場体験	身近な職場を体験することによって、働くことの目的と意義について考える
3年	上級学校訪問	自分の夢を実現できる進路の焦点化を図る

○ 高等学校での中核的な取組

1年	職業研究	どのような職業に関心があるのか、文理選択とからめて検討する。
	ボランティア活動	社会に対する視野を広め、様々な体験を通して自己の在り方生き方を発見する。
2年	ボランティア活動	
	職場体験	夢を実現するための進路を具体的に検討して、進路設計構築の一助とする。
3年	オープンキャンパス参加	
	応募前職場見学	

○ 中学生を対象としたキャリアセミナー

中学生が自己の在り方生き方について考える手がかりの一助とするため、安下庄高校の3年生の進路内定者が連携中学校を訪れ、自分の進路決定までの体験を中心に高校での学習の取組や部活動などについての体験やアドバイスを行った。



○ 日良居中学校におけるキャリアカウンセリング

高校教員が進路選択を迎えた中学3年生に、安下庄高校卒業生の進路状況や周防大島高校での学習の様子を説明した。また、生徒一人ひとりとの面談により、進路に関わる悩みの相談や、必要な進路情報の提供を行った。特に、高校の授業の様子や進路実現をめざした学習についての質問が多かった。中学生が感じている疑問や不安を理解することができ、今後の指導の参考になった。



エ 成果と課題

成 果	課 題
○ 高校生が、進路決定までの経緯や受験勉強の様子などを中学生に話すキャリアセミナーは概ね好評であった。また、高校教員が行ったキャリアカウンセリングにも、中学生が真剣に取り組み、満足度も高かった。	○ 中高間でより一貫性のある進路指導が可能か、その方法論について研究する必要がある。 ○ 授業の予習・復習、家庭学習の習慣を定着させるために、各方面と連携して指導を徹底する必要がある。

オ 今後の展望

生徒一人ひとりが自分の夢を実現するためには、各自が具体的な将来設計図を描き、その実現に向けて努力していける環境づくりが不可欠である。そのうえ、生徒には夢を実現しようという強い意欲が求められる。この、生徒が具体的な将来設計図を描く力と、自分の夢を実現するために主体的に取り組む意欲とは相互補完するものである。このことを念頭に、以下に挙げる課題に対する具体的な支援方法について検討していく必要がある。

- 基礎基本となる学力の充実・向上を図る。
- 生徒自身が自らの在り方生き方について考えるきっかけとなる体験学習・進路に関する講演会や多様な職種の職業人の話を聞く場などを企画・設定する。
- 自己実現のために必要な課題発見・解決力やコミュニケーション力、表現力の向上を図る。
- 効果的な進路指導のあり方を検討していくため、中・高教員を対象とした研修会を企画する。

(7) 「6年間を見通した生徒指導」の取組

ア 生徒指導目標

本地域において、生徒一人ひとりが自らの夢を思い描き、それを実現していくための支援として、生徒指導の立場から何ができるかを検討するにあたり、その大きな目標を次ページのように定めた。

イ 中高6年間の指導計画

生徒指導目標を達成するための指導内容を検討する過程において、6年間の連続した流れの中で、生徒一人ひとりが自らをみつめ、アイデンティティを確立し、その上で夢を実現していくことができる能力と豊かな人間性とを身に付けるために、各学年で必要とされる発達課題や指導内容についての再検討を試み、「中高6年間の指導計画」と「生徒指導年間計画」を作成した。そして、この「中高6年間の指導計画」と「生徒指導目標」をもとに、十分な生徒理解に基づいた継続的で一貫した指導に努めてきた。今年度も、これらの目標や計画の達成に取り組みながら、中高教員による活発な議論を行った。

	目 標	指 導 内 容	体験学習	関連活動
中学 1年	集団の一員として夢を持って生活する	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新たな集団への適応を支援する ・ 基本的な生活習慣が身につくよう、きめ細かな指導をする ・ カウンセリング等を通じて、能力・適性などの個々の情報の把握に努める 	ボランティア活動 ふれあいマラソン大会 「私の主張・郷土おしま」発表大会	集団宿泊 職業体験学習
中学 2年	基本的な生活習慣の確立を図り、正しい判断力を養う	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人ひとりが集団の向上に参加できるように配慮する ・ 基本的な生活習慣の確立を図り、正しい判断力を養う ・ 一人ひとりの心身の発達の差を考慮した援助に努める 		カウンセリング活動 修学旅行
中学 3年	自己の能力や可能性を認識する	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集団の中での自分の立場を理解し、行動することができる力を育てる ・ 社会のルールを認識し、実践できる能力を育成する ・ 自分の不安や悩みを把握し、適切に対応できるよう支援する 		ボランティア活動 新入生セミナー
高校 1年	自分を見つめアイデンティティの確立を図る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ふれあい活動」で培った人間関係を基に新たな集団を構築できるよう支援する ・ 社会の中の自分の立場を理解し、自己責任能力を高めるよう指導する ・ 連携校からの情報を基に、継続的なカウンセリング活動に努める 		修学旅行
高校 2年	自己を高め、主体的に生きていく姿勢を身につける	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他者との関係の中から、自らを高める姿勢を養う ・ 自己指導能力と社会的な自己責任能力を育てる ・ 自己を相対化し、視野を広げる中で、悩みを解決する力を育てるよう支援する 		体育祭など
高校 3年	自己の在り方に明確な考えをもち、夢の実現をめざす	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中高一貫校の最上級生としての立場を理解し、リーダーシップが取れる力を養う ・ 民主社会を構成する市民としての自覚と責任を身につける ・ 自立した個人として生きていく力を獲得できるよう支援する 		

中高6年間の指導計画

ウ 生徒指導年間計画

中高で一貫した生徒指導をめざすため、従来各学校で単独に行っていた様々な指導について、生徒指導に関連した行事と、生徒指導に密接な関係のある性教育及び人権教育をまとめ、6年間の中での位置づけを明確にし、一貫した指導を目指した(下表)。

(○学校行事、◎ホームルーム活動、※人権活動と関係が深いもの)

(ア) 中学校

	1年	2年	3年
4月	◎学級づくり	◎学年始めオリエンテーション ◎2年になっての中学生活	◎学年始めオリエンテーション ◎3年になっての中学生活
5月	○チャレンジキャンプ	◎生徒総会へ向けて	◎生徒総会へ向けて ◎修学旅行関係
6月	◎生徒総会へ向けて ○いのちの大切さを考える講演	◎生徒総会へ向けて ○いのちの大切さを考える講演	◎生徒総会へ向けて ※「岐路に立つ」 ○いのちの大切さを考える講演
7月	○ボランティア活動 ◎夏休みの過ごし方	○ボランティア活動 ◎夏休みの過ごし方	○ボランティア活動 ◎夏休みの過ごし方
8月			
9月	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭へのリレー選手参加 ※差別について考える ◎運動会に向けて	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭へのリレー選手参加 ※差別と偏見 ◎運動会に向けて	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭へのリレー選手参加 ◎運動会に向けて
10月	◎文化祭に向けて	◎文化祭に向けて	◎文化祭に向けて ※平等な社会を目指して
11月	○ふれあいマラソン大会	○ふれあいマラソン大会	○ふれあいマラソン大会
12月	○ふれあいみかん収穫作業 ◎冬休みの過ごし方	○ふれあいみかん収穫作業 ◎冬休みの過ごし方	○ふれあいみかん収穫作業 ◎冬休みの過ごし方
1月	◎学期始めオリエンテーション ○「私の主張」発表大会	◎学期始めオリエンテーション ○「私の主張」発表大会	◎学期始めオリエンテーション ○「私の主張」発表大会
2月	◎卒業式への取組み	◎卒業式への取組み	◎卒業にあたって ※人類愛
3月	◎2年次生となる心構え	◎最上級生となる心構え	◎三年間を振り返って

(イ) 高等学校

	1 年	2 年	3 年
4月	○新入生セミナー	◎ホームルームづくり	◎ホームルームづくり
5月	○生徒総会	○生徒総会	○生徒総会
6月	○中学校教諭によるカウンセリング	○中学校教諭によるカウンセリング	
7月	○文化祭 ※人権意識調査・標語募集	○文化祭	○文化祭
8月	○ボランティア活動	○ボランティア活動	○ボランティア活動
9月	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭
10月	○薬物乱用ダメ、ゼッタイ教室 ○中学校養護教諭によるカウンセリング	○修学旅行 ○薬物乱用ダメ、ゼッタイ教室 ○中学校養護教諭によるカウンセリング	○薬物乱用ダメ、ゼッタイ教室
11月	○ふれあいマラソン大会 ※高齢者問題	○ふれあいマラソン大会	○ふれあいマラソン大会 ※社会生活と人権問題
12月	○ふれあいみかん収穫作業	○ふれあいみかん収穫作業	
1月	◎学期始めオリエンテーション ○「私の主張」発表大会	◎学期始めオリエンテーション ○「私の主張」発表大会	◎学期始めオリエンテーション
2月	※エイズと人権		◎卒業にあたって
3月	◎2年生となる心構え	◎最上級生となる心構え	○卒業式

エ 取組

○ 豊かな人間性の形成とアイデンティティの確立

少子化など様々な理由により、現代では異なる年代間での交流が非常に希薄なものとなってしまった。その結果、集団の中でのリーダーシップや先輩を敬う気持ちが減退し、豊かな人間性の形成につながる体験が激減してしまったと言える。

我々は中高合同での体験的な学校行事により、生徒たちに年代を越えた交流とその体験から豊かな人間性が生み出されることを期待し、「体験的な学習を重視した学校行事」で詳述されているようないろいろな取組みを実践してきた。今年度、改善を加え実践したことを述べてみたい。

(ア) ボランティア活動

平成15年度まで行っていたふれあいクリーン作戦は、平成16年度から各学校の地域の実情を生かしたボランティア活動へと発展的に解消した。その結果、小回りのきく地域のニーズに応じたボランティア活動になったため、地域の人々により感謝されるものとなり発展を続けている。特に高齢化の進んだこの地区での若い力のボランティアは、われわれの予想以上に頼りにされている。

(イ) ふれあいマラソン大会（11月）

暖冬の影響で比較的暖かい日であったが、それ以上に熱気あふれるマラソン大会であった。この大会も地域や生徒達にはすっかり定着しており、沿道での暖かい声援のなかで精一杯走る生徒の姿は地域を盛り上げ、また、レース前後に先輩後輩の

間で談笑する姿は微笑ましく感じられた。

(ウ) ふれあいみかん収穫作業(12月)

広い農園ではリーダーの高校生の指示が的確なほど作業が効率よく進むため、高校生のリーダーシップを育成するのにふさわしい行事である。今年度も昨年度同様、どのようなリーダーシップが求められているのかを高校生に自覚させる事前指導に時間を割き、生徒達の献身的な活動を引き出すことができた。

○ カウンセリング活動

(ア) 中学校教諭によるカウンセリング

高校1年次生を主な対象とし、各中学校の教諭によるカウンセリング活動を実施した。放課後の時間を利用して中学校の教諭が来校し、相談室で実施した。例年、1学期はできるだけ最も親しみのある旧担任によるカウンセリングを実施しており、連携中学校出身の全ての生徒が訪れた。最初は全体での懇談会のような形になったが、その後、希望する生徒のカウンセリングを行った。また、このカウンセリングも定着してきたため、2、3年生も中学校の先生に挨拶をするなど、昨年度同様、たくさんの生徒が訪れたのが特徴であった。終了後、現担任を含めて教員間での情報交換を行い生徒理解に努めた。

(イ) 養護教諭によるカウンセリング

2学期には養護教諭部会と協力して、高校1年次生を主な対象とし、中学校の養護教諭によるカウンセリング活動を実施し、その後情報交換を行った。今年度は養護教諭の異動の関係で、全ての中学校の養護教諭に来ていただくことは叶わなかったが、心身の発達を中心にかかわってきた養護教諭の視点からの生徒理解は、生徒にも教員にも非常に有意義なものであった。また、中学校時代に養護教諭との関わりが強かった生徒については、今後の対応等も検討することができた。

生徒の感想をいくつか紹介しておく。

- ・高校の先生には話せない事など色々話せてよかった。(1年男子)
- ・先生は全然変わってなくて、中学校の時と一緒に優しい先生でした。たまには中学校に遊びに行きたいです。これからも頑張っていきたいと思います。(1年女子)
- ・久しぶりに中学校の話ができてよかった。中学校のときの自分の様子から、いいアドバイスをもらえたので満足です。(1年女子)

○ 新入生セミナー

今年度入学の74名の多くは1学年1クラスの小規模な中学校の出身であるため、小学校から9年間にわたってほぼ同じ人間関係の中にいた生徒も多い。こうした新しい人間関係の構築に不慣れな生徒達にとって、高校入学直後の指導は非常に重要である。そのために設けた宿泊行事が「新入生セミナー」である(今年度は4月12日～13日)。宿泊行事が生徒達の親睦に有効であることは明らかであるが、授業時間数の確保や保護者の経済的な面から実施できない学校が多い。幸い、本校から6kmの位置に宿泊訓練施設「大島青年の家」があり、現地集合現地解散により保護者の経済的負担を押さえて行うことができるため、入学時のオリエンテーションを兼ねることで授業時数への影響を避けながら実施している。

昨年度に引き続き今年度も、集団行動や規範意識、また基本的な生活習慣の徹底に力を注いだ。「大島青年の家」の全面的な協力のもと、アスピーからカッターポートまでの訓練をほとんどの生徒がやり遂げ、生徒達に新鮮な一体感、達成感が生じ

たことが感想から窺えた。また、セミナー終了後、ホームルームで異なる出身中学校の生徒達が談笑しているのを見るのは、大変嬉しいものである。

オ 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ カウンセリング活動は定着しており、的確な情報交換ができただけでなく、高校1年次生がスムーズに高校生活になじむための潤滑油にもなっていた。 ○ 各行事を通じて異年齢間のふれあいができた。また、新入生セミナーでは、新たな集団の中で良好な人間関係が形成できている。 ○ 中高で統一した服装指導の基準の作成が始まり、6年間のスパンでの生徒指導の在り方についての議論が一層深まってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒指導の効果を更に高めるために、中高での一貫した指導の基準を完成させ、また、各校でどのように運用していくのかについての議論を深めていく必要がある。

カ 今後の展望

中学校の統廃合により連携の枠組みが変わりつつある現状ではあるが、生徒指導を行う上での共通理解を深め、また、生活指導や服装指導を中高6年間統一した基準の下で行うことが有効ではないかと思われる。近年、生徒の規範意識の低下が懸念されているが、中高で協力して継続した指導を心掛けることで、中学校・高校のどの段階でも一貫した基準を生徒に示すことができ、効果的な指導の実現が可能となるように思われる。今後は、中高一貫した服装指導の基準の完成を目指すとともに、実際の運用面での検討も含めて、中高教員による協議を一層重ねていきたい。

(8) 各教科での取組

ア 国語科

～数値化できない学力充実の方法の研究～

(ア) 取組

- 6年間を見通した古典の指導についての研究
- 思考力を高めるための読書指導についての研究
- 豊かな表現力を育むための指導についての研究
- 定期テストにおける共通問題を更に充実させるための研究

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 中学校と高校における古典学習が有機的につながり、指導の連続性が増すことになった。特に、「周防大島高校の求める5教科の力」で具体的な項目を挙げることによって、中高のつながりを強く意識することができた。○ 中学校での「朝の読書」の継続により、高校でも読書への抵抗感が少なくなり、読解力も向上し、思考力の基礎となっている。○ 適切に表現する力を育むための指導を、ホームルーム活動や特別活動と連携しながら、展開することができた。○ 定期テストの共通問題を観点別に設けることで、生徒の実態把握がより明確になった。	<ul style="list-style-type: none">○ 古典に興味を持たせる指導を、より工夫したい。○ 思考力をさらに伸ばしていくために、中学校および高校での日常的な読書指導を、授業等の時間を使って継続していきたい。○ 物事を多角的にとらえる習慣を身につけさせるために、学習形態を更に工夫する必要がある。また、6年間を通じて豊かな表現力を育むための連携した指導を工夫したい。○ 語彙の乏しい生徒のために、語彙を増やし、かつ、正確に理解する学習を増やしたい。○ 学力観についての共通理解を一層深めていきたい。

(ウ) 今後の展望

読む力、書く力を育てることは容易なことではない。何より生徒一人ひとりがさまざまな事に興味・関心を抱き、思索しながら日々を生きていく姿勢を獲得することが肝要である。そのために、中高で継続的に読書指導を行い、生徒達に読書の習慣を身につけさせることは、必要不可欠なものである。また、今後は表現力を豊かにするために、語彙を増やす指導を徹底していきたい。

イ 社会科

(ア) 取組

- 中学校社会科公民的分野及び高等学校公民科「現代社会」における
 考査問題の比較・考察
- 中学校間で共通化した単元テストの結果等を参考に、中高での生徒
 の定着度の低い分野についての分析・考察
- 中学校社会科公民的分野及び高等学校公民科「現代社会」における
 研究授業の実施

(イ) 成果と課題

a テストの結果の生徒へのフィードバックについて

中学校において、単元テストを積極的に実施し、その結果を速やかに授業に反映させることで、生徒の学力向上をめざした。年に数回の定期テストと比較して、生徒へのフィードバックが効率的に行える利点がある。また、比較的狭い範囲で実施する単元テストは、生徒にとっても目標が立てやすく、常に気を抜かずに勉強させるには有効な方法であるように思われる。

b 中学校社会科公民的分野及び高等学校公民科「現代社会」における研究授業について

中学校社会科公民分野と高校公民科「現代社会」で同じ教材を使って互いに研究授業を実施。互いに実際の求人票と過去の求人票を使い、「雇用と今日の労働問題」について学習した。同じ教材を使用し研究授業を実施することで、理解度や到達度の違いを知り、相互理解を深めることができた。

(ウ) 今後の展望

連携3中学校では、昨年度同様、基礎学力の向上を目標にして単元テストの共通化に取り組んでいる。これは基礎・基本を定着させるのに有効なだけでなく、自主的に学習する習慣や意欲づけにもつながっていくと考えられる。この習慣を高校でさらに定着させることによって学力を向上させ、生徒一人ひとりが希望する進路を実現させたい。今後は高校卒業時の進路選択を意識した中高間の連携の在り方を追究していきたい。

ウ 数学科

(ア) 取組

- 交流授業の取組の工夫・改善
- 学力向上のための指導（春休み学習会）

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 高校における授業は昨年度まで、発展コースと基礎コース各1クラスの計2クラスに編成して実施したが、今年度は発展コース1クラス、標準コース2クラス、基礎コース1クラスで編成し、数学Iで、週1回ずつ中学の先生とのT・Tを実施することとなり、各クラス決めの細かい指導ができた。○ 中学における交流授業は、高校の教員が各中学校に週1回2時間と増加した。○ 春休み学習会では、学習会前に課題を与え、当日は課題の提出、課題テストの実施、採点・返却と問題の解説を行った。採点結果の返却を直ちに行うことにより、予習の必要性を感じさせることが出来た。	<ul style="list-style-type: none">○ 中学での交流授業についての改善が必要であるという意見があった。○ 久賀中学校での交流授業について安下庄校舎、久賀校舎のどちらが担当するか等検討が必要である。

(ウ) 今後の展望

今年度も定期テストの共通化等、各校間の意思疎通が十分図られていた様に思う。今後、久賀中学校が入ってからも、頻繁に情報交換をする必要がある。また、中学校の数学教員は各校1人しかいないので異動の際には十分留意したい。

また、今年度から中学での交流授業は3年生と各学校の実情に応じて選択授業・他学年の授業に入ることができた。これにより、高校の教員にとっても、中学生にとっても、中高一貫教育という実感を得られていたように思う。

エ 理科

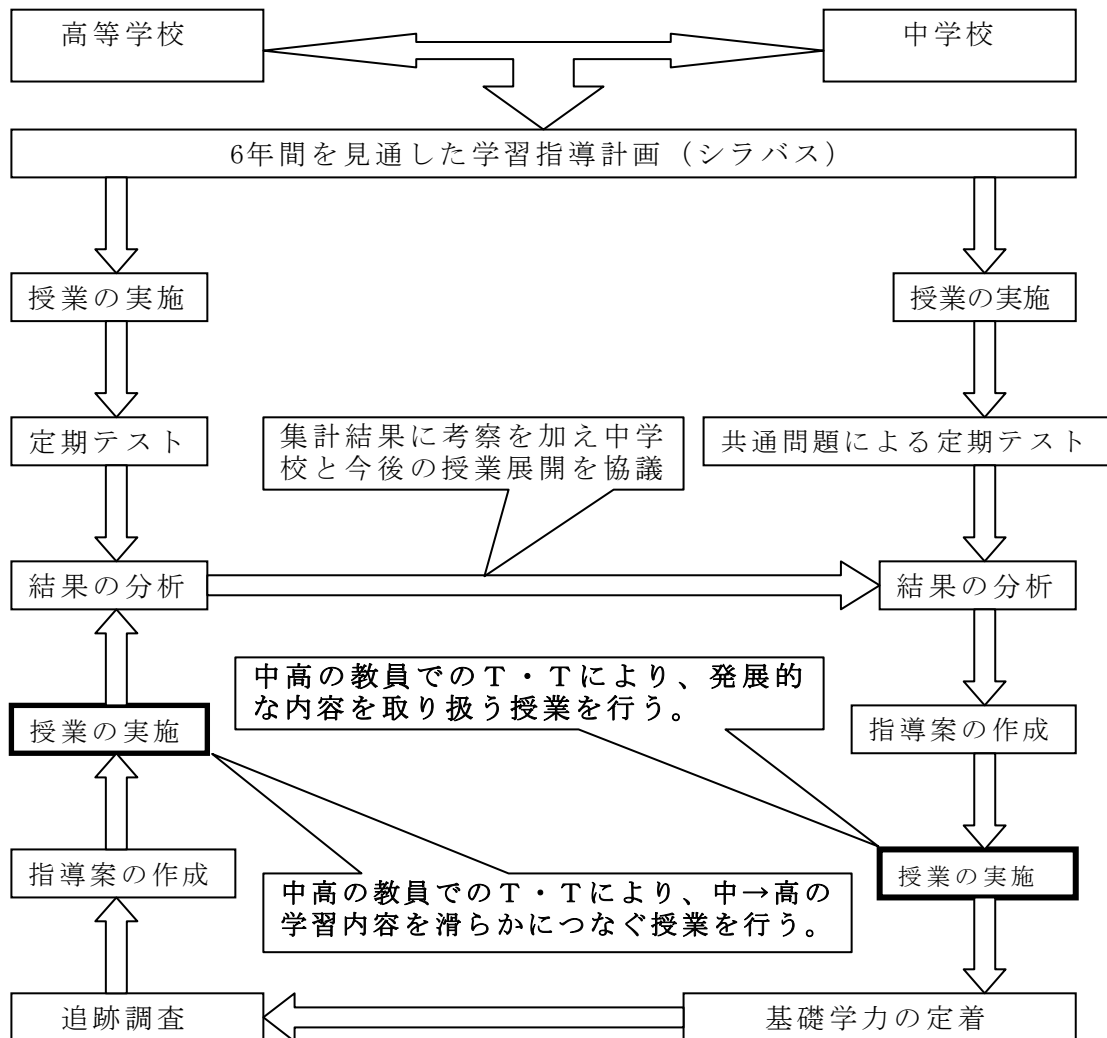
～基礎学力定着システムについて～

(ア) これまでの取組

6年間を見通した学習指導計画（高校ではシラバス）をもとに、連携中学校間の定期テストの共通化とテスト結果を分析している。「なぜ原子や分子の学習が定着しないか」から端を発し、「発展的な内容により興味をつなぐことができるのではないか」、そして「どのような内容を学習に取り入れるか」を検討し、中学生に対し発展的な内容の学習を高校の教員とのT・Tを取り入れることがより効果的であるとの一つの結論に達し、化学分野の単元「物質のつくり」で実践した。

昨年度から新たな取組として、高校での[結果の分析]から高校での[授業の実施]にフィードバックする過程で、中学校の教員とのT・Tを取り入れた。

実施した単元は、理科総合Aの物理分野の「力学的エネルギー」で、過年度の高校の定期考査のデータの分析により、これまで定着度の低かった「加速度の概念と力の関係」について生徒の理解を深めることを目標とする。



(イ) 今年度の取組

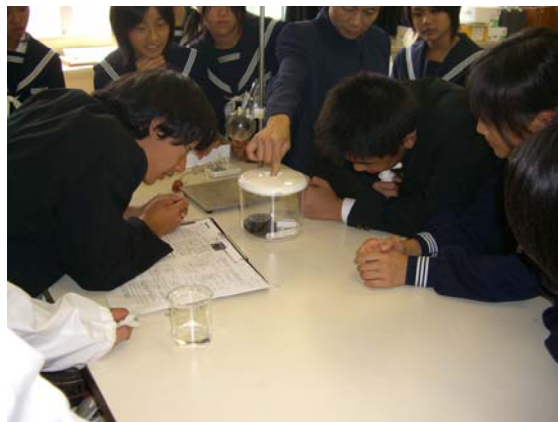
① 定期テストの分析結果

- ・中学生では、理由を答えさせる問題の正答率が悪い傾向があり、文章表現能力向上に向けた取組が必要である。
 - ・磁力線の書き方があいまいである。
 - ・全体的に理科の学力の低下が見られる。
- 対応について、今後中高の教員間で連絡を取りあう。

② 発展的な内容を取り扱う授業（高→中）

日 時	平成19年(2007年) 11月2日 5限
場 所	日良居中学校 理科室
指導者	T1 小川敦子(日良居中学校) T2 瀧本高児(周防大島高校)
单元名	[天気の変化]
主 眼	雲の発生について実験を通して、そのでき方を気圧・気温および湿度の変化と関連づけて理解させる。

高校教員が中学校に行ってT・Tを実施することによって、個に応じた指導の工夫と、高校で学習する「断熱膨張」を発展学習として取り入れ、高校の学習への意識づけをさせた。



「中高の教員でのT・Tによる、高→中の発展的な内容を取り入れ興味をつなぐ授業」の風景

③ 中学から高校への学習を滑らかにつなぐ授業

日 時	平成19年(2007年) 12月14日(金) 5限
実施学級	1年B組23人(物理教室)
使用教材	『高等学校 理科総合A 改訂版』啓林館
指導者	杉本昌一(T1:周防大島高校)、松村道夫(T2:東和中学校)

中学教員が高校に行ってT・Tを実施することによって、個に応じた指導の工夫と、中学校から入学した生徒が高校での学習に戸惑わないように、比の計算やベクトルなど、つまづきやすいポイントをどのように導入するか協議した。



「中高の教員でのT・Tによる、中→高の学習を滑らかにつなぐ授業」の風景

(ウ) 今後の課題

推薦入学合格者には、理科総合Aの分野も含めたドリル形式の宿題を合格発表時に渡し、入学式後にテストを実施している。しかしながら、高校に入学して、少数を少数で割ることに困難な生徒や分数計算が出来ない生徒が近年増加しており、高校1年で学習する理科総合Aで授業についていけない生徒もいる。連携中学生の内定後の学習へのモチベーションをいかに保たせるかが今後の課題である。

オ 英語科

(ア) 取組

- 中学校におけるE S英会話の授業内容の充実・発展と、高校教員の指導方法の工夫・改善
- 中学校・高校における基礎英語力の増強
- 英語技能検定試験の合同実施
- スピーチコンテスト、英語による面接練習でのALTによる指導
- 定期テスト問題や交流授業における授業案等の情報の共有化
- ガイドライン作成による中高教員の情報交換の活発化

E S英会話の授業内容の充実・発展のため、本校高校教員が中学校での郡所属のALTとのT・Tによる授業を参観し、これからのT・Tの在り方について議論した。

また、中学校・高校における基礎英語力の増強のため、今年度は、高校教員がT2として加わる中学校での授業をE S英会話のみでなく通常の英語の授業とした。また、中学校教員がT2として加わる高校での授業を引き続き英語I（グラマー）とした。また、高校生の基礎英語力増強のために週1回の英単語小テストや、英単語週末課題

を課した。

さらに、英語技能検定試験については、今まで人数が規定以上集まらず開催することができなかった回があったが、4校の合同実施により、生徒が受検する機会が増え、その結果、英語に対する意識が向上した。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 中高共に相互の指導内容や生徒の学習の進捗状況が把握でき、自校で補強すべき点が明確になった。 ○ 中高共に交流授業において、基礎英語力の増強を試み、生徒の実態を把握することができた。 ○ 高1の授業について、中学校教員が、中学校での既習事項を説明してから本時の授業内容に入るというスタイルができ、高校の授業内容への移行がスムーズに行えた。 ○ 高校所属のAL Tが週に1度のペースで中学校へ訪問できるので、中学生にとっては貴重な体験となっている。 ○ スピーチコンテストや英語面接指導については、文章校正から発音指導まで、中学生、高校生ともにAL Tからの直接指導を受けることができ、生徒の英語力が向上した。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ T・Tの指導法の改善が必要である。 ○ 各授業の前の中高教員間の十分な協議時間の確保が必要である。 ○ 中学校の通常授業に加わる際、AL Tの活用法を議論していかなければならない。 ○ 高校所属のAL Tが今年度日良居中学校へ訪問することができなかった。

(ウ) 今後の展望

今年度ガイドラインの改訂が進んだが、中高ともにガイドラインを活用し、内容を充実させるために、中高教員相互の協議をさらに深めていくことが重要である。

T・Tについては、中学校の通常授業とES英会話、高校の英語Iの授業で行っているが、各学校の時間割作成上の制約などから、事前に十分な協議時間を確保することが難しかった。

AL Tについては、本校所属のAL Tが各中学校に訪問しているが、昨年度から始まった、週に1日の久賀高校への訪問や本校での授業数(11時間)、中学校での授業2時間の授業に移動の時間を含めた計4時間の時間確保のため、時間割を変更することが非常に困難になっている。そのため、今年度は日良居中学校への訪問は叶わなかった。加えて、今年度は本校での英会話の授業でのAL TとのT・Tを1時間減らして対応した。来年度は、どの学校でも最大限AL Tが活用できるように、多方面に渡る条件整備が望まれる。

カ 音楽科

(ア) 取組

- 専門性を活かした効果的なT・Tの在り方についての研究・実践

(イ) 成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none">○ 合唱指導におけるパート練習で、T1・T2がそれぞれ女声・男声パートに分かれて範唱をしながら指導することで、発声のイメージが明確になり効率の良い練習ができる。○ 器楽の指導において、個別に時間をかけて指導することができ、早い段階で問題点に気づくことができる。○ 中学生の音楽に対する関心や技能を把握することができ、高校での指導の際に、より個に応じた指導が展開できる。	<ul style="list-style-type: none">○ T1・T2が共に男声の場合は女声パートがイメージを作りにくいこともある。○ T1・T2で指導のポイントを共通理解し、すべての生徒に対し一定以上の指導を行う必要がある。○ パート練習では時間ごとに指導するパートを変え、ひとりでも多くの生徒とかかわりを持てるようにする必要がある。また、パート練習の際にも、個々の生徒に目を向け、個別に指導する必要がある。

(ウ) 今後の展望

T・Tによる指導では、T1・T2それぞれの専門性を生かすことのできる授業を行っていききたい。そのためにも、歌唱・器楽・鑑賞・創作の分野より、バランスよく適切な教材を選択し効果的な指導を行っていききたい。

歌唱指導ではT1・T2が女声・男声それぞれの範唱をすることで、基礎的な発声の技術を伸ばして行きたい。器楽の指導においては、個別指導を中心にし、個々の問題点に気づき効率の良い指導を行いたい。鑑賞・創作の指導では、生徒が自ら積極的に学習活動に取り組むことができるような、説明や発問を考えていきたい。

中学生・高校生のそれぞれの発達段階を踏まえての、生徒一人ひとりの音楽に関する能力・適性、興味・関心を把握し、系統的な情操教育を行っていききたい。

キ 保健体育科

(ア) 取組

- 柔道の授業における練習方法及び指導方法の工夫・改善

連携校では、柔道を武道の共通選択種目とし、中学校で得た柔道の技能を、いかにして高校で発展させるかをテーマに研修を重ね、柔道の基礎・基本から発展した指導方法まで共通化し、実践研究を行ってきた。

連携4校の保健体育科の教員が昨年度、今年度で5名中4名が入れ替わった為、今

年度は、これまでの研修で積み重ねてきた、柔道の授業における指導方法や、共通化した内容などを再確認し、共通理解の徹底を図った。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 連携校において教科の評価や指導方法が共通化できるようになった。 ○ 連携校の生徒の基礎体力や技術等が確認できるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 連携3中学校の生徒数が減少し、男女共修や他学年合同の授業が増えてきているため、指導計画の共通化を工夫しなければならない。

(ウ) 今後の展望

指導方法や練習内容などこれまでの研修で共通化した内容を再確認し、共通理解することができた。しかし、連携校以外の中学校からの入学や、連携校の生徒数の減少等もあり、高等学校での柔道の授業の進め方をさらに工夫していく必要がある。

今後は中高一貫ストレッチや柔道の授業など、連携校が共通して取り組んでいる内容のさらなる定着を図り、高等学校入学後、連携校の生徒がリーダーシップを取り、授業を盛り上げていけるよう工夫、努力をしていく必要があると考える。

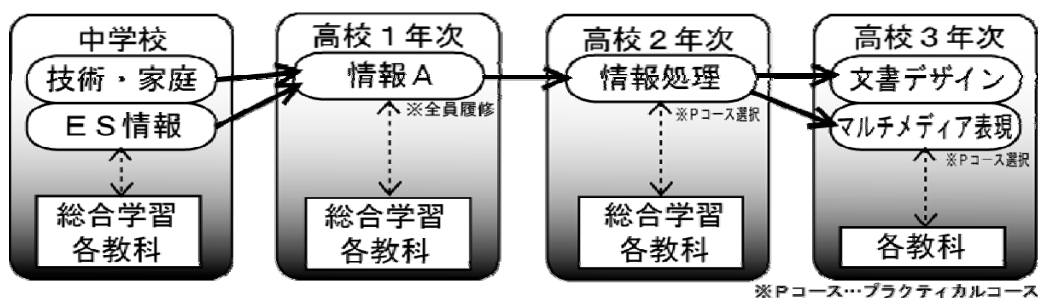
ク 情報科

～6年間を見通した「情報教育」における中高教育課程の連携～

(ア) 取組

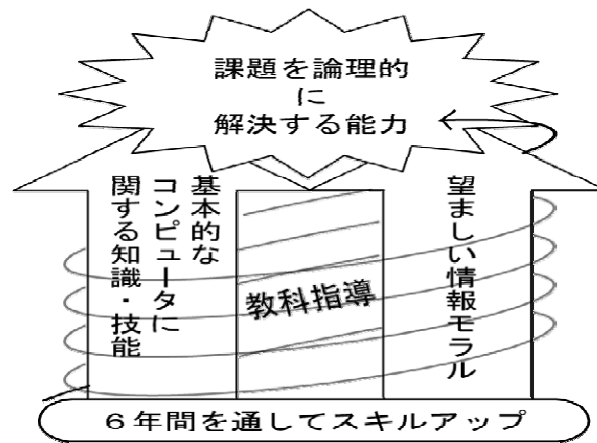
- 望ましい「情報モラル」の育成
- 基本的なコンピュータに関する知識・技能の習得

下記の表は中学校と高校の情報教育に関する科目を示したものである。矢印で科目の連携を示した。全生徒が情報教育を受けるのは高校1年までの4年間である。



＜ 6年間を通した情報教育の系統図 ＞

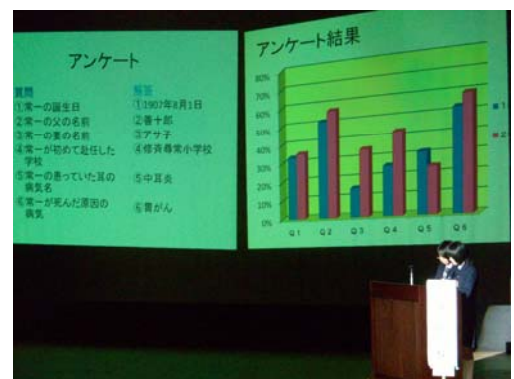
次の図は情報教育を実施していく上で、柱になっていくものを決め、それを図示したものである。2本の矢印の上に生徒に最終的に求める力「課題を論理的に解決する能力」が掲げられている。6年間を通した教科指導の中で「基本的なコンピュータに関する知識・技能」「望ましい情報モラル」を身につけていく中で「課題を論理的に解決する力」を身につけて欲しいというものである。「課題を論理的に解決する力」は目に見える形で現れるものではないが、情報化社会で生き抜くために生徒に身につけて欲しい力である。



< 情報教育の目標の関連図 >

(イ) 成果

「総合的な学習の時間」の成果を発表し合う「郷土おおしま」発表大会で、テーマ学習のプレゼンテーションを中学生と高校生が互いの作品を目にすることにより、いかに情報を効果的に発信し、表し方に工夫を加えるか等、情報の収集や伝達の仕方に対する興味を高める効果も期待できる。さらに、教員同士が指導内容を共有することにより、授業の質が向上するものと思われる。



(ウ) 課題

中学校が保有するパソコンの台数や、情報教育を実践している技術の時間が非常に限られていること、そしてインターネット回線の通信速度が不足していることなど、ハード面が不足している。そして中学校間でハード面・ソフト面において異なる実践をしている情報教育をいかに根本的な部分で連携していくかなど課題は山積しているが、これから社会に出ていく生徒にとって、情報教育は必要不可欠なものである。その一方で、近年インターネットを通して、トラブルに巻き込まれる児童が全国的にも増加してきている。情報モラルについて、どのような取組が可能か、中高教員で一層の連携を図りながら、今後検討していきたい。

4 おわりに

今年度は、来年度からの連携枠組み拡大を控えての準備の1年となった。教務主任会議には久賀中学校・久賀校舎の教員も参加し、また10月からは交流授業の試行もスタートし、研究授業等も行われた。

連携枠の拡大により、連携型中高一貫教育の規模も大きくなり、これまでの実践をそのまま行うことは難しい状況が考えられる。来年度以降の課題として、現在行っている中高一貫行事がそのまま実施できるのか、スクールバスを廃止してからの行事等での輸送手段がどうなるのか等挙げられる。これまでの橘・東和地域での中高一貫教育の実践を踏まえながらも、周防大島地域の中高一貫教育としての新たな実践を考える時期になっていると考えられる。

今年度の実践研究の課題であった「周防大島高校が求める5教科の力」(ガイドライン)については、事例集も完成し、活用も浸透してきた。来年度はこの活用事例集を中学校に配布し、さらに効果的な活用を検討したい。

もう1つの課題であった中高一貫した生徒指導体制の充実については、生徒指導部会を中心に各校の校則を持ち寄り、服装・髪型等の基準のすりあわせが行われた。これにより生徒も落ち着いて学校生活を送ることにつながった。しかし、統合の影響で中高一貫の枠組外、特に大島郡外の生徒が増加してきたため、高校全体として落ち着いた雰囲気をつくるかということが課題となってくる。

以下に、来年度の目標を挙げておく。

- 新たな枠組みでの中高一貫教育システムの検討および模索
- 再来年度の中学校の統合や新教育課程に対応した中学校の教育課程の作成

まず、来年度から周防大島高校と久賀中学校を含む4中学校との中高一貫教育となる。今まで以上に距離の離れた学校との中高一貫教育の実践を行っていくことになるので、今までの取組のすべてが来年度以降も行えるかどうか懸念される。また、再来年度には郡内の中学校が4校に統合されることに伴い、全4中学校との連携となる見込みである。来年度の検討は、再来年度を踏まえてのものになる必要がある。

今までこの地域で行われてきた様々な取り組みのうち、どれを継続してどれを変更していくことになるのかという議論になることが予想される。これまでも、このような議論は様々に行ってきたが、新たな視点と新たな体制で臨むことが求められている。これまで積み上げてきた中高一貫教育の実績を再検討し、新たな方向へと一歩を踏み出して行くことが必要である。

その中でも特に、平成21年度から新教育課程への移行期間に入るため、平成21年度以降の周防大島地域の教育課程を、連携中学校と十分に検討し作成していかなければならない。

来年度以降も「地域の子供を地域で育てる」という原点に立ち返り、周防大島地域の中高一貫教育の実践をさらに進めていきたい。